

淡路國名所圖繪

卷之一

10  
1  
19

館書圖京東				
五	九	一	〇	
冊	號	架	函	類門

1995/11

神  
不  
申  
小  
台

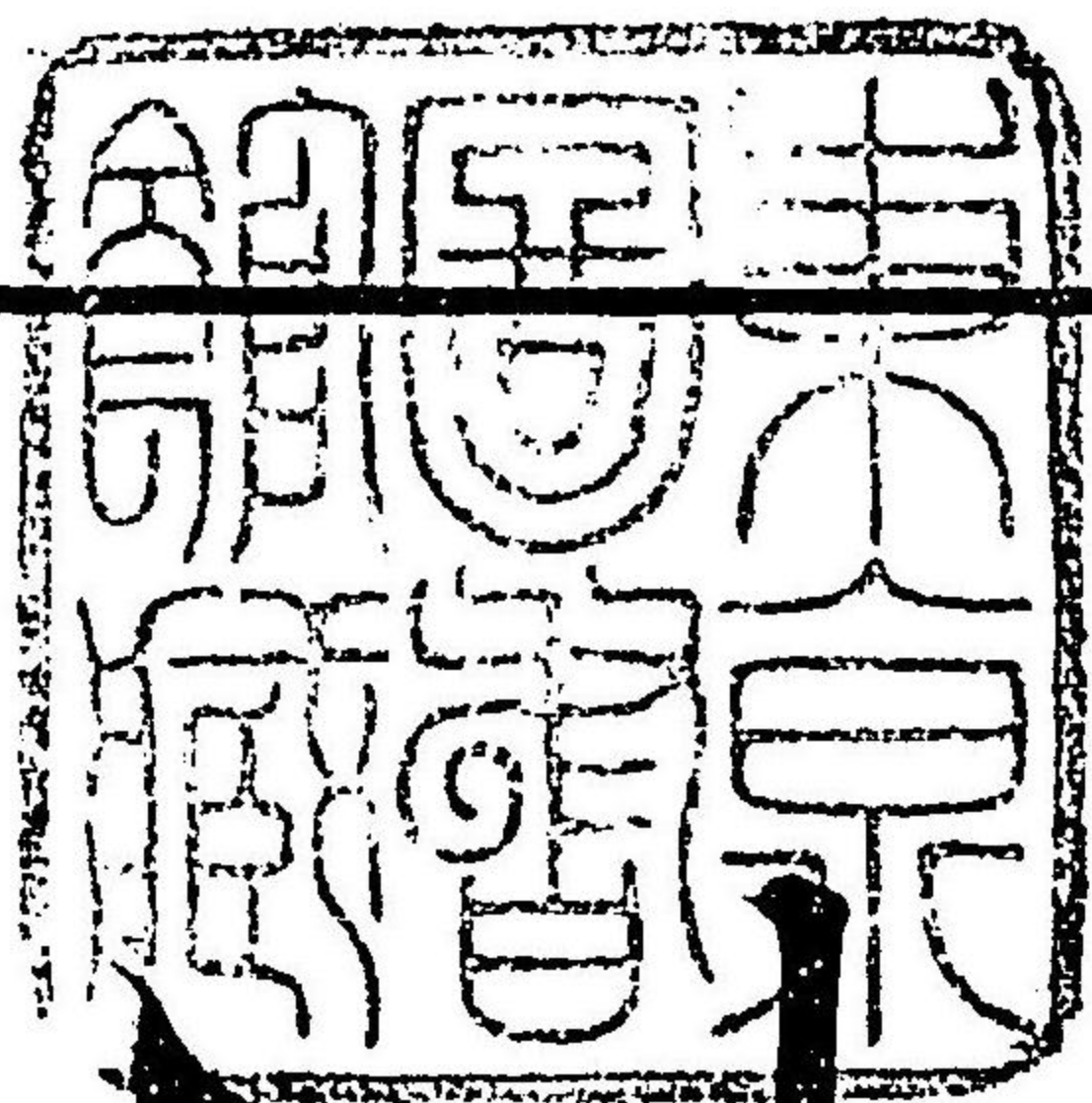


從二位侯爵蜂須賀茂韶君題字  
故從二位慈光寺實仲卿序文  
故 曉晴翁鐘成著  
故 松川半山翁畫  
故 浦川公左畫圖

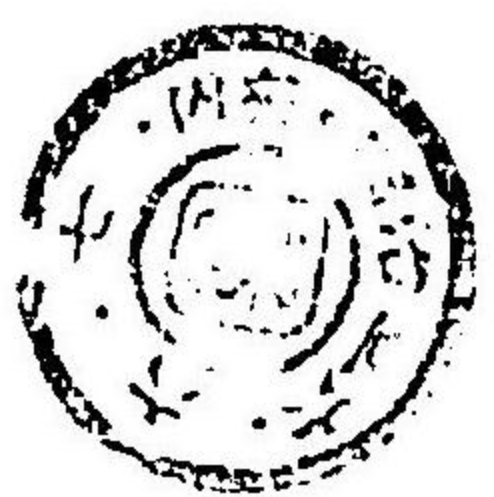
**淡路國名所畫會**

藻文堂發兌

18995/vv.



神台



故 從二位侯爵蜂須賀茂韶君題字  
故 從二位慈光寺實仲卿序文  
故 曉晴翁鐘成著  
故 松川半山翁画  
故 浦川公左畫圖

淡路國名所置會

藻文堂發兌



心靜

從位侯爵蜂須賀茂韶書



此の世に後世の世に  
有るは世に世に世に  
元々世に世に世に  
世に世に世に世に  
世に世に世に世に  
世に世に世に世に  
世に世に世に世に

日 月 星 辰 皆 有 道

風 雨 晦 明 皆 有 道  
陰 陽 消 長 皆 有 道  
天 地 盈 虧 皆 有 道  
人 心 之 動 亦 有 道

此 道 之 理 亦 有 道  
萬 物 之 化 亦 有 道  
一 切 之 事 皆 有 道  
若 不 明 此 道 則 無 道  
若 不 明 此 道 則 無 道  
若 不 明 此 道 則 無 道  
若 不 明 此 道 則 無 道

慈光寺從二位實仲卿

六丁丸歌

しんせつねんしんせつねん

淡路國名所因會既界

一とせまのぬ火の筑紫の遊歴を吾浪速の浦を船出  
きり風順をびりて須磨明石の漂い稍淡路國名所  
浦の船を定めぬ然るに日毎風行りて容易に  
そつてもらむとて船中より空を送りて本意  
あり糸の舟あり負招帆の浦も此辺りなり  
上りて漂はれつと跡と尋ひ繪巻の破り衝かす  
めく先山より大悲の具像を拜し養直の郷より守護  
職の館の古跡より國司館の旧地も市村より明雲僧正が

潜居の蹟ハ舊吉野と云ふ所ニ西行法師ハ古歌ハ潮  
寄ヨリと云ふ沼島と云ふ所ニ海息所の薄命を思ひ  
出ル奈の武文ガ忠死を哀ミ 廢帝の山陵ニ詣ルハ  
幽宮乃御墳を推ル所ニ漫ニ袖を絞ル鶴鴻乃  
城趾ハ賀茂冠者義次の竈アリ可ク能登守教經ガ  
射切と云ふ宮もろくま行者ガ獄戸崎ヨリハ鳴門乃怒  
濤直下ニ見ヘ榎並郷ハ屯倉リ旧趾幡多郷ハ自疑  
島歴然と云瑞井宮ハ 反正帝の降誕也ト由キ  
御蹟と云顯阿弥の池願海寺ハ弘法大師の遊方記ニ

出ル淺野の原富嶋ガ磯野島ガ崎おもハ古人志モ  
詠歌と云名地アリ其餘神社佛圖の靈場数アリ暇  
アリ尚日を重祓ル此処彼処を見めぐ折リ里人の曰  
此志苑の浦ハ小西友直ト云老人ヨリ年々此地の名所  
古跡をめぐり搜索ル其傳ハ怒ミることおも畧アリ味  
地名ト題キ 數百卷を著セリト云希ハ討ハ初シ淡い給ハ  
是と覺ハあハ告ル所ニ急ギ彼所ニ至ルハ是時風遽ニ  
替リ疾風を解んと促セリ余おもハ新ニ社園を  
順覽ル今一段を残スモ哀惜ハ今般ハ能ハ



劫くるをさきまんと船長は女と説諭し心よく  
うけいきて重祓その便船と約しつ直ふ帆と揚て方りぬ  
斯く程は余此地とままり志筑の浦よりしてかの嶺を  
訪ふは夷や人の命は雨の晴間をも待りのわく登蓮法  
師が言を至しと亘るる彼回し人ハ廿二日言をう  
節は身よりぬく聞て六いふ今更は袖つぎし思ひ  
せしきしも尚其處の家嗣し錦江とつて方て是も  
頗風雅と好こめやまの書はうらうらとされ新しき勲の  
中みも父着かたりて懇に説ふれ且味地草と題し

遺稿とも見せしむるふより聞及ばはは旧跡とも考へ  
或は安澄りの容信めしホの説も聞知て幾も  
ちびを重祓しり於余後も見りこざる處こそは揮りおめ  
尋くの日と経て後叔郷より一里見聞のありしと書  
ふれりふいつく五巻といはせぬまは書肆の需は應  
トて嗚呼いぬしとも斯極本の上をたしといはなま  
看客を拙支は免ししは從他は圖し強ひむ  
と希し曉晴着るは

凡例

此編の前は述べて置く。岩屋の浦に泊りて順覽せしと其まゝ小著しむれば。郷中の境郡界の差別と糾まば。故に始め津名郡岩屋の浦に起り三原郡宇原に移り又先山より津名郡安坂なり斯く再び三原郡奥畑に戻り余後又津名郡鳥飼に順歴し原の岩屋にめぐり其所より頭郡各と記し看官これと察しや。其旧跡詳ありし者ハ画圖のつとめり前後の文に拘りて之を加ふ。文中小安澄云又ハ容信云安雄云など有ハ皆當國の故人より豫て考へ置し。按と出はりのあり。旧家の記録諸藝の名家孝子等の傳より有と之ども事繁しむればあれと畧は是ハ小西氏の味地草に詳あり。

淡路國名所圖會卷之一目錄

淡路國風景	同國跡始原	岩屋浦	産石岩屋礫
淡路迫門	烽火舊地	伎踊古例	石屋溪
石屋神社	神之前	磐椽樟神社	鶴領嶋
繪島	岩屋古城	大和島	水無瀬山
八幡祠	別當坊	水晶山	開鏡山
觀音寺	松帆浦	在應實春館	宰相法師古趾
龍松	楔川	蛭兒祠	清水井
祖板山古城趾	大谷川	鳥帽子岩谷	女夫岩
貝石	生月出生之地	鳥崎の岩窟	鳥崎川
赤崎	黒岩端	鳥帽子岩	潮清水
湯槽趾	楠本川	本願寺	八幡宮

福龍寺	塩濱之古趾	古城跡	向殿古城
浦川	白山権現社	末馬郷遺趾	伊勢久留麻神社
西念寺	假屋浦	下田浦	釜口浦
釜口溪	三立崎	八幡宮	妙勝寺
名産豆豉	西山古城	清水寺	月山牧
清光寺	城山	鍛冶屋谷	末國安古趾
蠣岩	錢神原	平塔婆原	高神子山
御館遺蹟	猪隈谷古墳	陣屋古趾	小田將監古城
佐野浦	佐野ヶ崎	柴能ノ端	森ヶ端
佐野八幡宮	圓成寺	榎原薬師堂	實盛祠
牛石	大黒岩	鳥取石	辨財天祠
興隆寺	何者滝	前之滝	法蓮淵
生穂浦	賀茂神庫記録	生穂川	四社明神社
浄土寺	高瀧寺	經墳松	西明寺
經墳松	拜石	投石	古城蹟
土居松	兩乞山	巫女舞石	中内川
摩耶山	金剛院	岡山清水	長谷ヶ滝
岩窟之瀧	屏風岩谷	野田尾川	馬石
大谷八幡宮	野雲菴	高部虚空藏菴	御旗松
志筑郷遺趾	志筑浦	名産鯉鱖	引攝寺
奥之坊	八幡宮	志筑神社	糺社
比叡御前社	圓滿寺	福田寺	静女墓
極樂寺	勝示川	放生川	臨池菴
王子権現社	多聞寺	王子川	飯盛山
薬師堂	念佛堂	杉尾社	足趾池
五本松	笠松	日外内藏助古城	妙安寺

東海國

東海國



新明題

あつてやよ

あつてはの

あつては

六

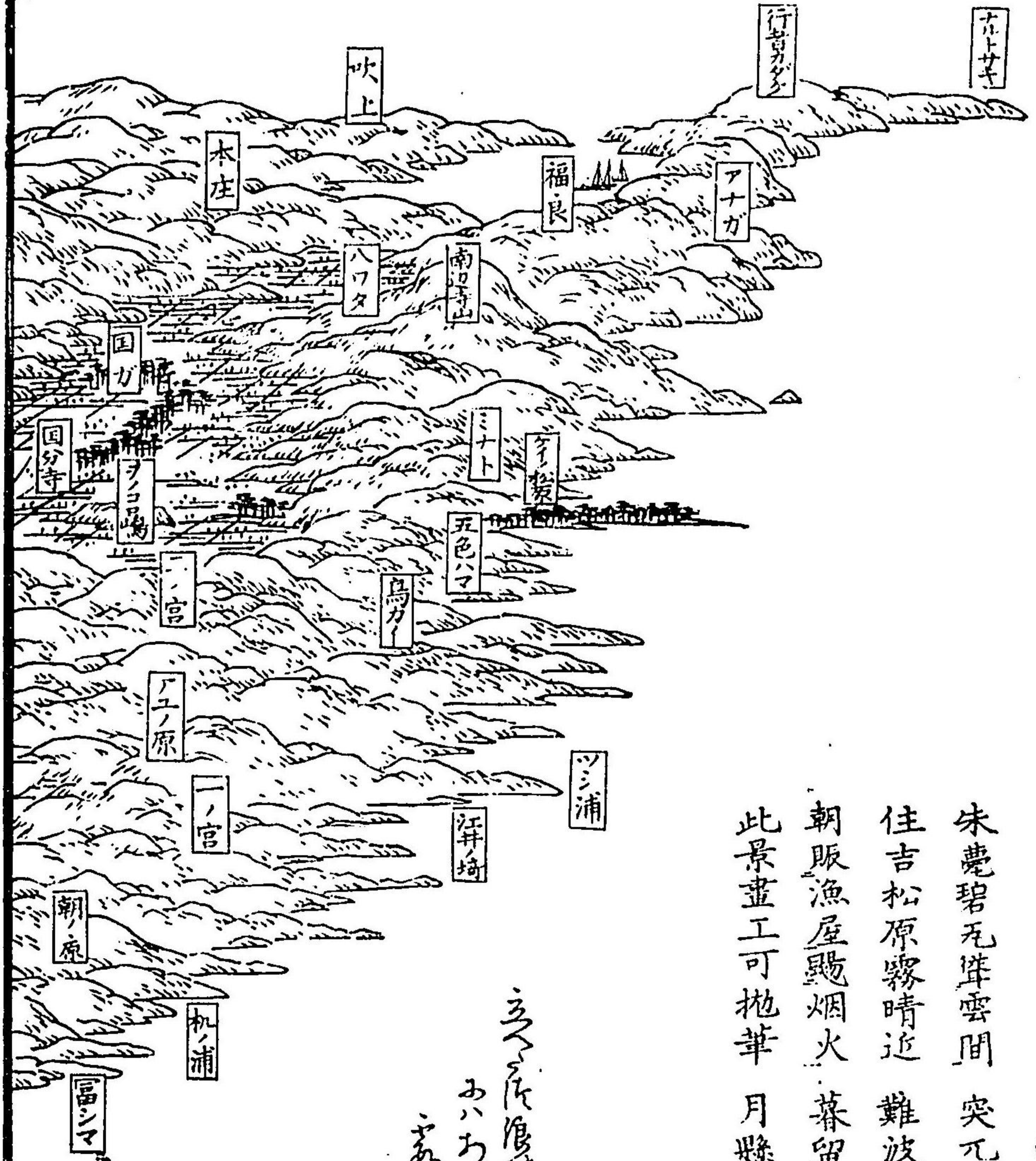
あつては

あつては

基

- |        |       |       |        |
|--------|-------|-------|--------|
| 長尾山観音堂 | 志筑川   | 御門林   | 土居山古城  |
| 越後殿邸趾  | 高松氏邸趾 | 碁石山   | 鹽尾浦    |
| 大慈山観音堂 | 橘崎    | 住吉神社  | 妙見祠 同池 |
| 下司溪    | 覺王寺   | 雉子尾古城 | 春日神社   |
| 春日寺    | 密性寺   | 古城蹟   | 鹽田溪    |
| 蓮華寺    | 河合古城  | 塩田古城  | 菅古城    |
| 斤林山大師堂 | 雙石    | 二石川   | 大照寺    |
| 市原庚申堂  | 松榮寺   | 平安郷遺趾 | 平安溪    |
| 安呼岩窟   | 八幡宮   | 安宅古城  | 墳穴     |
| 上磯下磯   | 諏訪社   | 水之大師堂 | 炬口古城   |
| 八幡宮    | 成願寺   | 離火推現社 | 西来寺    |
| 兆殿司古趾  | 塩屋川   |       |        |

淡路國畧圖

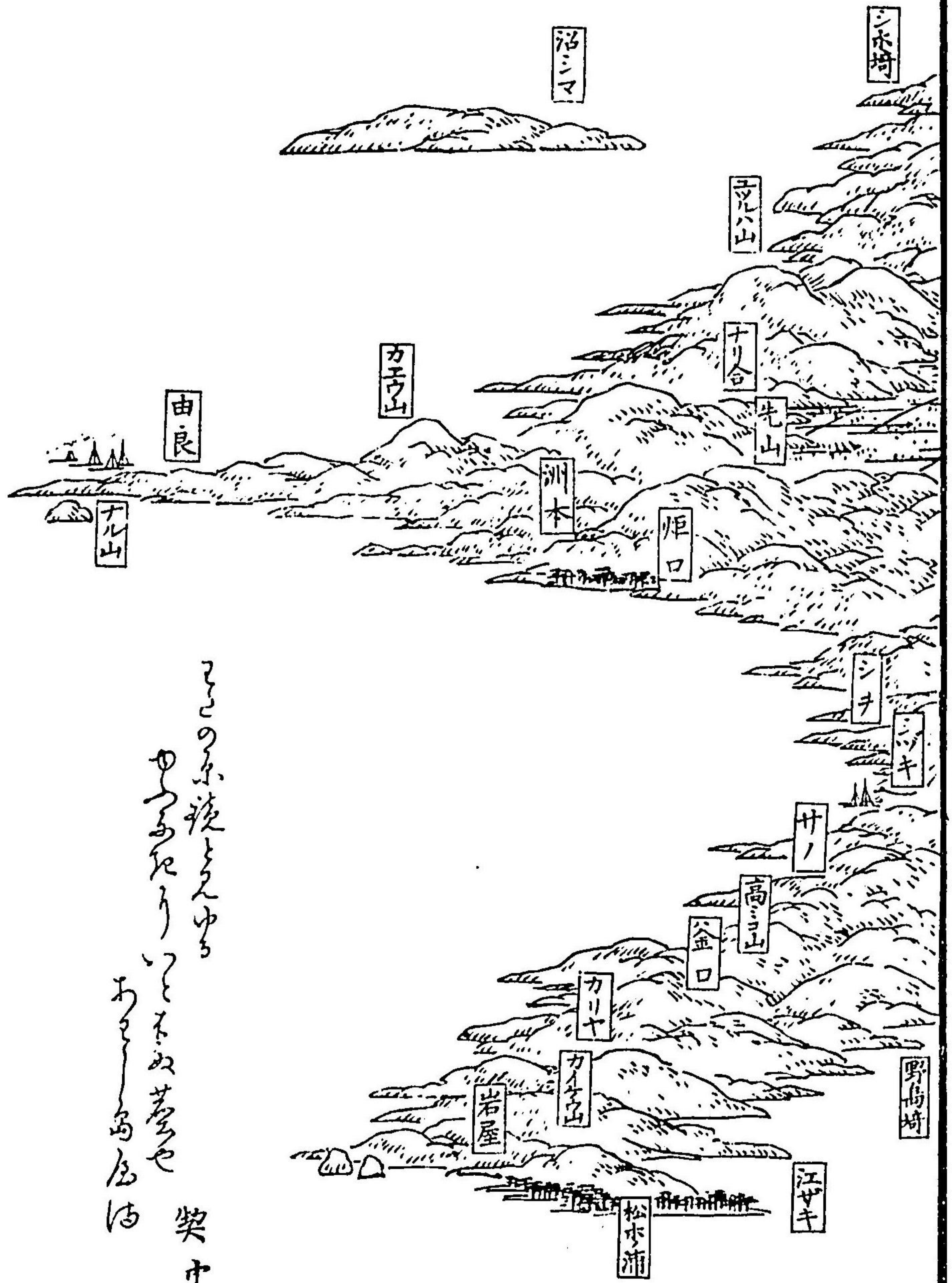


南梁和尚

朱薨碧瓦聳雲間 突兀城樓誰敢舉  
 住吉松原霧晴迤 難波葦浦浪清閑  
 朝販漁屋颺烟火 暮留客船宿水灣  
 此景盡工可拋筆 月懸淡路島高山

東麻呂

三つ尻原のひま  
 おろろのひま  
 あつたのひま  
 淡路のひま  
 やほ



この島は  
 中つたなり  
 あつたなり  
 島名は  
 柴中

半山島

淡路國の南海道ありて幾内中洲と左に四國山陽と右に東に攝津和泉南に紀伊阿波西に讃岐小豆嶋北に播磨その海中の一洲ありて大八洲の中央に位せり日月の照るごとく其宜きふかひて寒暑酷烈ならず土暖み水清く庶物生と安んず瑞穂の國の開闢も此國よりぞ始りてかせりて上管二郡ありて衣帛魚鹽等乏しからば良材又多し小上國あり日本紀神代卷曰伊弉諾尊伊弉册尊破取盧島小降りて共為夫婦して洲國と産むとおぼし時小至りて先淡路洲とありて胞との意は快まる所あり此故に淡路洲といふあり又曰大日本秋津洲と生給ひ次不淡路の洲といふ又曰おのころ嶋といふ胞といふ淡路洲といふ諸説ありといふも淡道吾耻 畢事記 阿波施 日本紀 萬葉 阿波の國へ渡る海路に有嶋あれば阿波道ありて古事記傳小見也 此説からとも 其餘穂狭別嶋 古事記 御食向淡路 萬葉 御食津國等の異号あり

淡路島 淡路島山 淡路瀉

日本紀 卷十 應神天皇紀曰淡路島へ海は横りて難波の西にありて峯巖紛ひ

錯りて陵谷相續き芳草蒼蔚に長瀾潺湲亦麋鹿鳧雁ありて其嶋ありて云按此國の滄海の中みありて山川秀く美あり且住吉の松向浪花の浦頭より遠く望むと烟雨風雪の景色朝は變り夕は改りて実は無雙の奇觀あり故に古今の人歌よみて詩賦ありて是と賞むてと云

日本紀曰應神天皇二十二年春兄媛吉備小往ぬ天皇高臺小居りて兄媛の船と望み歌を曰

阿波施辞摩異椰敷多那羅瑪阿豆枳辞摩異椰敷多那羅瑪豫呂辞枳辞摩之魔儂伽多佐例阿羅智之吉備那流伊慕搗阿比泚菟流莫乃

○

萬葉 難波方塩干丹立而見渡者淡路島尔多豆渡所見 荒磯超浪乎恐見淡路島不見哉將過幾許近乎 同 住吉乃崖尔向有淡路島何怜登君乎不言日者無

古今 廣海のわがふささるる白妙の波めてゆる浪路は山 讀人不知

新古今 春とりば霞ふりか昨日まで波回見へ浪路島山 俊惠法師

同 秋深きわらわりの島の有明傾く月と送る浦風 大僧正慈因

玉乘 浪路が夕日がくれの浪の上小釣より海士の袖や凍く 從位家隆

名勝詩集陶器十景中浪路残月 羅山子道春

南海水面生一漚来域寂初浪路洲渾沌氣洩

草頭露滴々凝結億萬秋今夜金盆映波浪天

光雲影照雙眸應是玉兎出岩巖可惜玉母鏡

欲收吾聞乾坤生諸子此島元是同胞胚錦繡

忽被曉風脱姮娥浴後向西流住吉松間誰眺

望争如身裏十二樓

上管二郡 國の東北と津名郡と号は俗に上郡といふ京畿に近けれは三原郡と下郡といふ

和名類聚抄曰浪路國津名郡 津 三原郡 美波 良

常磐草云往古ハ廣田郷と養宜郷との間南北に且り山と隔つ故ハ廣田以東と

津名と養宜以西と三原と然る中世以来廣田賀茂二郷と三原郡と隸するハ

古制は遠方のあり云三原郡ハ國の西より下郡と稱は大抵上郡ハ山谷多ク

水東流一郡ハ平原多ク水西流ハ古事記ハ水齒別天皇のころ蝮部と

定め品陀天皇の皇女と浪路三腹郎女と名づけ給ふも皆此地名あり日本紀

ハ御原と作り三腹蝮とハ三原あり蝮と美波良と訓むハ波美の古語あり

ハ波美ハ他蛇ハカウラハ腹大ハカハみウラハと言と約めみウラハ古語ハ

言ハ多クハ三原と語の通へとの借用たるあり按ハ古ハ此國と遊獵の地と

應神仁德履中允恭の諸皇も行幸ハ給ふれば天子の遊幸ハ止マ給ふ所と

御原と名けらるる郡の名ハありありハ御獵野の原の意あり

日本紀ハ御原と書ハ正字ハ語の通ハ後世三原と書ハ

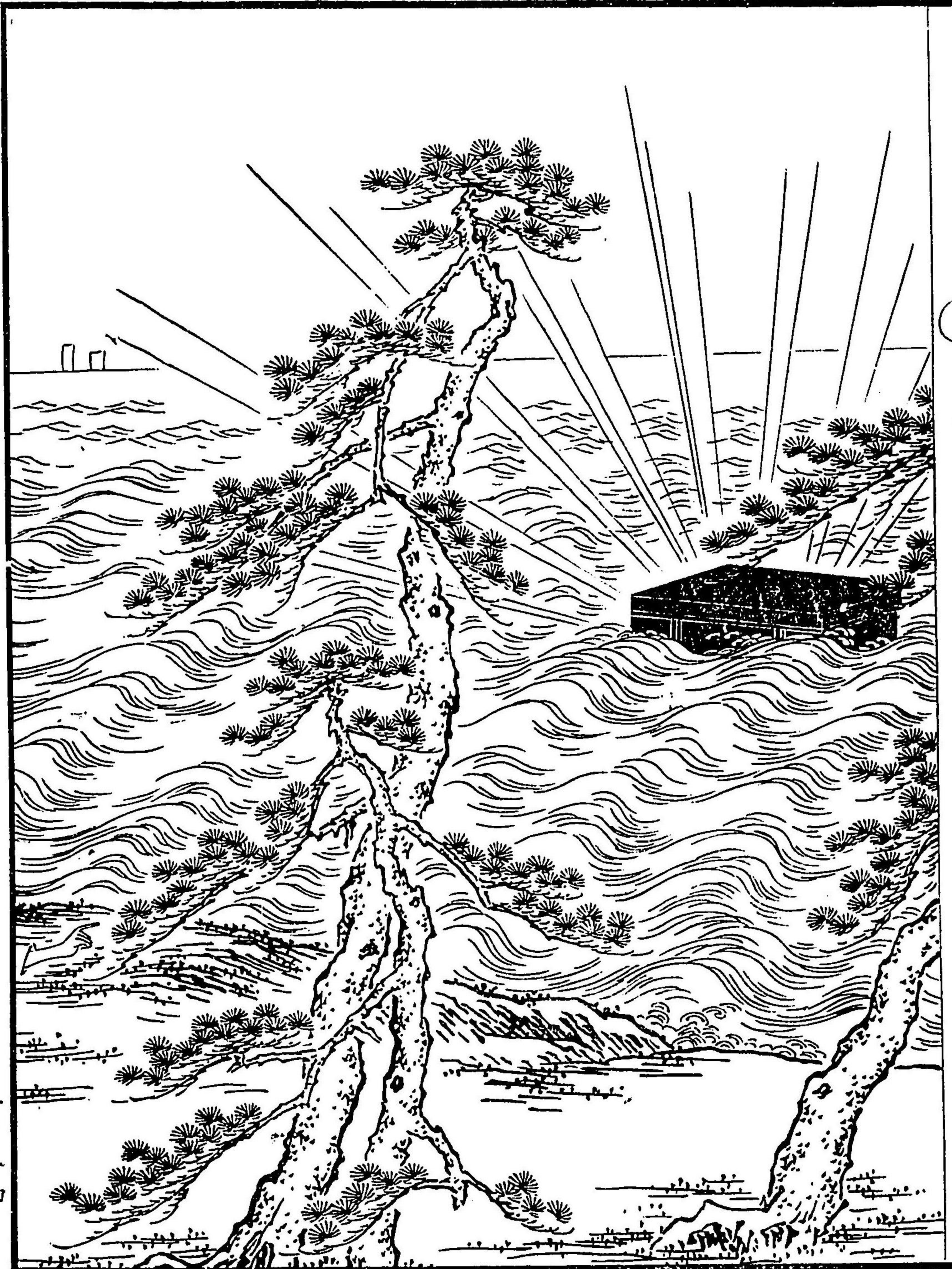
岩屋浦 津名郡ハ國の北極に播磨の明石攝津の須磨に對ハ延喜式ハ石屋ハ作浦ハ大

當浦ハ播磨明石對ハ海上と隔るハ僅ハ一里あり故ハ畿内中國より陸路





往昔淡路國若原浦  
 夜々光り漁人わらへ  
 舟の網をひきし未だ  
 唐櫃といふ其じつの上  
 正覚如普論像祈謹  
 上日本國の王家と書  
 せりよつて内裏と書  
 太子早く見あひて是を  
 我の七世の持せしと  
 尊崇一帯は身  
 うよまはせし像は長す  
 八分をよと後弘法大  
 師今の太像と作りかひ  
 胸中一初とよとよ  
 元亨釈書徳古事六  
 角堂縁起小見たり



烽火舊地

岩屋の浦へ瀨戸明石の渡り口あり故に渡りの為ふ岩屋の傍に相國の火と燃と

續日本後紀曰仁明天皇承和十二年八月辛巳淡路國明石濱始置船

并渡子以備往還云

袖中抄曰撰津國須磨と淡路の岩屋とあり所より淡路口までありに淡路へ

下る急ぎの便船ありれば須磨の浦まで火と燃あり夫は淡路の岩屋の

濱は火と燒くありすあり扱迎ひの船とつるひとぞ申は其火たくと

飛火と云ふと云ふ又と云ふ火のくも云あり

新勅撰

淡路島ありの煙見せむびく霞とつる春の舟人

前内大臣

正治書

淡路の白通ふありの煙霞より須磨の明の

寂蓮法師

淡路とつる女のめとくを

夫木

つるせむ飛火も今の立俵ぬ声もかろるぬ淡路島山

敦條左京兆 顯輔

尤烽火の渡口のあり昔の所々小峰と置其急告の備と今も國より尚有との

伎踊古例

常浦に於て毎年七月十五日公館の廣庭に浦人集りて伎踊と催夫より所々小あり

里老云天正年中先公の阿列一國の守護職にありまは時此浦に御滞船の

事あり其頃浦人の薩摩に通ふ者ありて薩列の風流とありて取

あゝ衆人これと甚珍らして説きやゆありて御徒然の御慰みとて御上覧小

備へて屢御悦喜ありて稍東都へ御系府ありて程あり淡路國御拜領の台命と

蒙り給ひあり故に右御吉例踊と稱し毎年公館の庭にて與行あり此時御紋附の

高挑燈二張と照し御番年の人見物ありて踊人男子あり十五六歳より

壯年の者或は六十餘ある者も出る面々音頭と出太鼓二挺ありて最

古雅あり踊あり一は薩摩踊あり一は御屋敷踊あり

石屋溪

當石屋村の山中より出る海へ入

石屋神社

石屋の浦の中央より東南の海岸街道の傍の岡より繪島明神又天地明神とも稱は

本社 祭神三座 國常立尊 伊弉諾尊 伊弉册尊 各々神像と鎮は

攝社 八十萬神 神像と鎮は座像ありて立像あり

拜殿

棟札の銘曰奉造立天地明神拜殿一宇兩列太守松平侍從源某 寛永廿二月 宥室

石鳥居 題碑云 日東開本天地神前花表向海國家安全  
貞享元甲子林鐘吉辰

同額 文云 天地大明神傳云 小野道風筆ありと  
里俗の云 寛政年間浪花よりの修覆せしむ彼地にも数株せしむ

常磐草云 按るに祭所の神名總社の社あり月讀尊といひ淡路神社記より石窟の

中ふりり小祠なりと云 然れども石屋神社ありは石窟の中ふ有べきものと云ふ

今の天地明神と称する神社といふありと云

例祭八月十五日當地より西の方濱つていふ八幡の宮まで神輿出御ありしに駕輿丁の浦

人等の前以て齋し火と改め當日より各海潮ふ浴し白帷子と素襖侍鳥帽子と着し

警小神兼てかゝ道と唱へ太鼓と唱へ静小神輿と昇渡御あり奉る供奉の神官

前ふ立て大幣と捧げ社人の鉾と持し左右小列に別當坊とれとつて神輿と守護し

供奉の人々三種の太鼓と高きふ唱へ神樂と奏し八幡宮の拜殿に入御し奉れば

御膳御酒品々の色香と捧げ種々の神事ありし後海濱に遷し奉る此所あり

祝詞奉幣し神樂と奏し次ふ神の角力と十二三の子供相撲あり神官より双方へ

褒美とせし次より子供藝あんどつとも神慮可笑と思ふと覺目没の頃本宮還御

ありする程は産子の言ふ及び近國近在より系流の老若群集ひ終日いと賑し

一説は能因歌枕よりこの國の社の社といふは是ありと云

神之前 天地明神の宮と繪島の間の海濱といふ明和年間山口貫道はとて宇津室の修行せ

磐椽樟神社 同浦繪島とて五十歩あり天地明神の北の海辺より則ち古城跡の山の岸下ふ

祭神 三座 伊弉諾尊 伊弉册尊 蛭兒尊

貫道云 磐椽樟神社式文より岩屋神社と出たり岩窟の内ふ二神ふ蛭兒と合せ

祭る二尊始め蛭兒と産むひ磐椽樟船ふ載り流しありといふ事跡と残せり又

淡路神社記にも石屋神社の石窟の中ふりり小祠ありと云

常磐草ニハ延喜式に出たり石屋神社の天地太神宮ありといふ何れも是ありや尚考べ

一説は往昔石窟のと廣うとて城と築く時窟と切たてし由今僅か残たり惜む

べはあまうといふ

或云此石窟ハ伊弉諾尊がたまはる幽宮なりといふ因に按る小旧事記幽宮と

淡路列は構り寂然ふ長隱ありといひ亦淡路の多賀は坐りといひて幽宮と

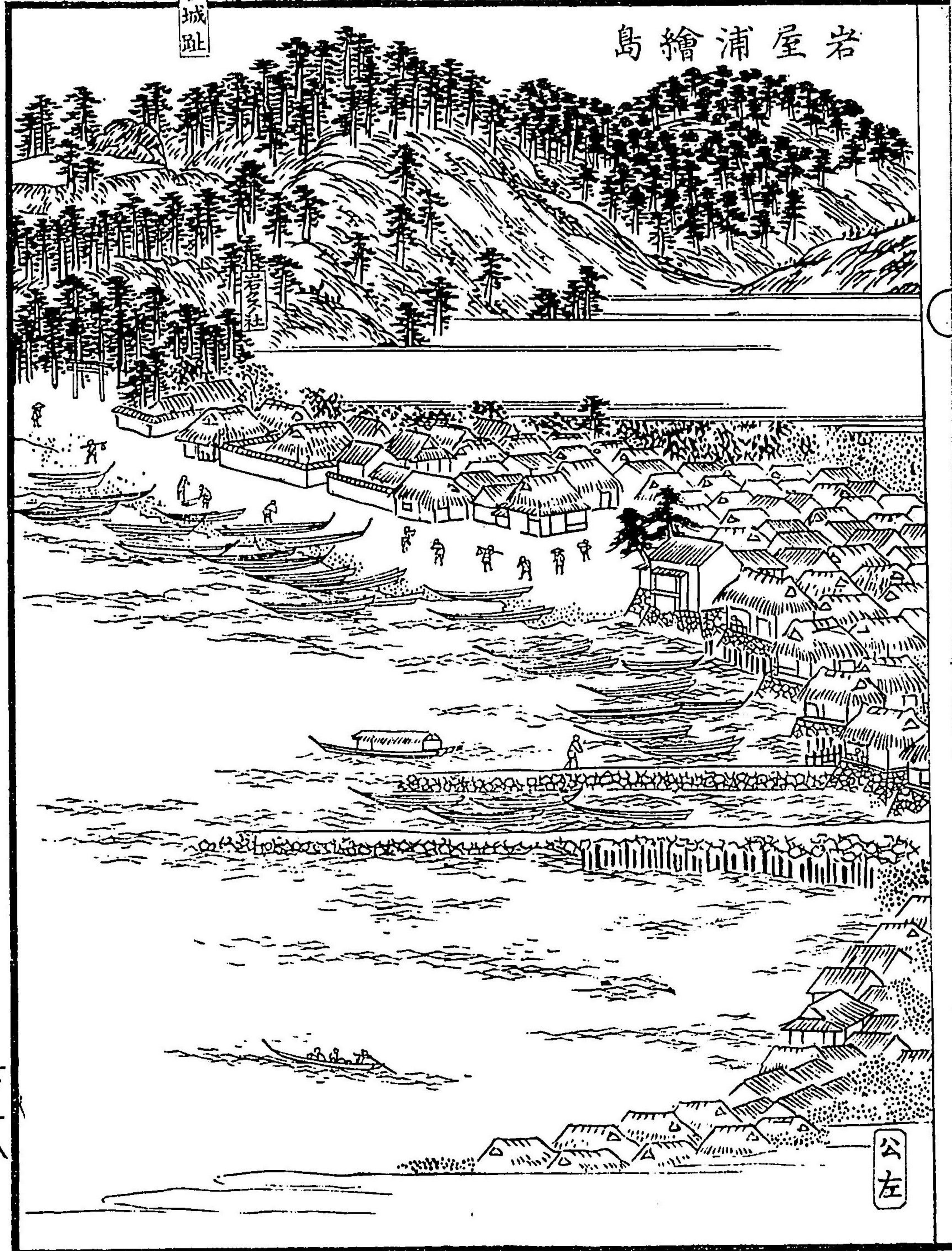
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と  
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と  
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と  
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と  
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と  
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と  
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と  
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と  
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と  
多賀と分る記一日本紀の幽宮と日之少宮とを分る筆は日之少宮と

繪島 石窟のゆるく五十歩ぐらうの磯はついで海の方へ出て島山あり平場東西十二間余南北廿間余  
此地の嶼ありてその其光景尋常ありて滑る碧のいろ輝き巖高く聳へ土赤く黄  
やして又黒き所あり其中小一塊の丹石ありて赤珠の凝聚するが如し又海より寄  
来る波は石面を磨き盡す文とわらわら自ら種々の象とありて恰も彫る如く

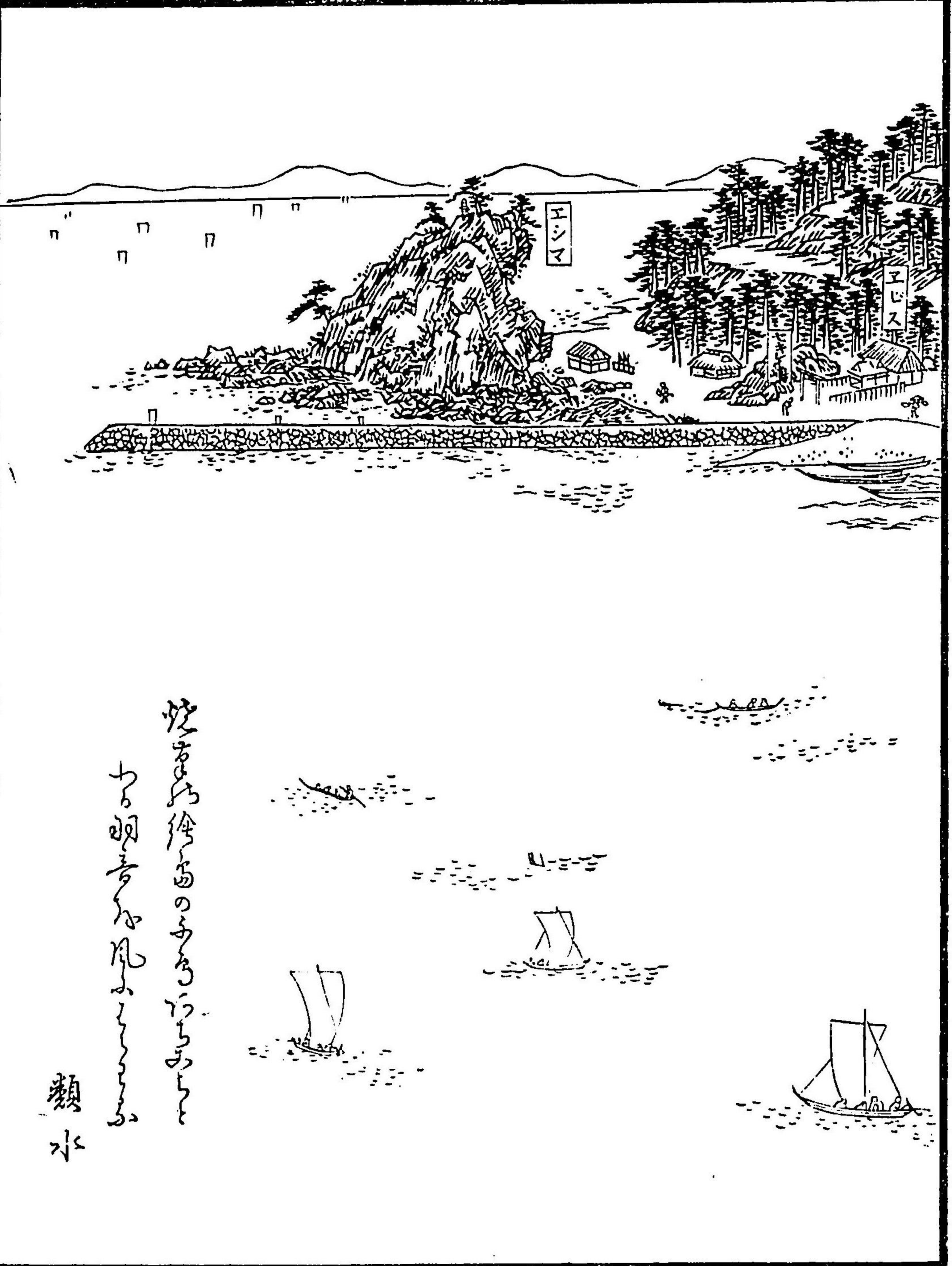
繪くが如く玲瓏として愛するふ比類あり山の根盤は平地あり其廣さ凡東  
西十二間余南北廿間ぐらうあり此は奇石ありて里入ありけり九郎左衛門石  
小画嶋獅子頭曹石山伏置縁産湯鹽飛巨おど林と皆金色ありて高く  
出づる形の似るとして号く是の土の凝りあるる物ありて山の下のり  
直は峭く立く攀登して難く項の緑樹数株繁茂と夏は類ひ希あり  
異嶋あり古くも繪島が磯繪嶋が崎繪島が浦繪島の里ありて詠する此西に  
とぞ日本奇蹟考小播磨の海の渚の石は繪ありて故に繪島といはるる(當  
嶋と訛るものや)播磨の家島と名づるは混ざりあり又島山は  
絶頂は一基の石塔と置り高凡三尺許梵字と彫る何人の所為ありやと云  
或云海人の男狭磯が墓といひ或は松王小兒の菩提の爲に平相國清盛の建る所と  
いひ或は無官太夫敦盛の墓標ありといひ何れも信用ありて  
磯取廬嶋日記曰我邦の脐帯の所は磯取廬嶋なり斯島は淡路洲の西北の隅小  
在の胞島とあり蓋神代卷小曰磯取廬嶋為胞生淡路洲といふ本文よりて

岩屋浦繪島

古城趾



公左



燈臺は海島のふちのふちにある  
その明かりは遠くまで届く

瀬水

言安きが故に俗常より胞嶋と呼び又かのころ嶋の名と存る斯島の岩も圓く玉の如く湧出したる石幾千といふ数とあり其形表の金氣を以て包み裏より土砂を會ひ誠は金輪を以て地輪を縮鎮しは形中心金性主とあり土金の秘訣顯然より是全く瓊子の滴瀝分散し其俛凝まりたるもの也其外産鹽金枚子かどりの世帯道具の形も自然石に現れ嶋の風景樹木の葉色岩の滑澤あはるるに書かざるに難し一歩歩くと運ぶ人誰か感嘆せざるや云又同書曰大神貫道云兼く予が宿願のついで用意せし事あれば其夜明和四日又の刻むるに健あつ門人と擇び竊に礮取盧嶋繪島の絶頂に攀登りて一字の神祠を建てるに加持する宝釧と納りて天神七代の神具を祭り奉る此所より神祠あり礎の残り侍りて更再興の志ありたるが不思議は今夜願望成就して松風の声荒磯の浪は心神と澄し自己神の生玉は皎々真父母と拜謁し奉る其貴く辱き事かざるは三部の枝三部の神経と讀誦し神樂歌と奏し曰阿波礼阿那面白阿那多乃志阿那夜氣於氣天御柱國御柱無動國

毛豊尔天地乃神乃誓乃礮取盧嶋阿南止布戸安奈止布戸。と午の舞足の踏處とありは己不東雲のそら近くあり侍りぬ云殊は中秋の月の光り澄まると此夜の空の各残とされば独あこの嶋は遊び瓊子石の上座し各月や牙の滴の岩の上登句して爰より夜とありぬ云道範上人紀行曰仁治四年仲春二日の暮方淡路の石屋に著て巡覧する小青巖の形緑松の粧碧潭の色晚嵐の聲其感は堪ば愁緒と忘れたる諸繪島の明神不詣し法施法樂の暇もかくあむ見るばつらつら小語らむ繪嶋ごとくあり神もこれ住す平家物語曰福原の新都よりくくる人々各所の月と見んとく或は源氏の大将の昔の跡とまのびつ須磨より明石の濱つらみ淡路の瀬戸を押しつら繪島が磯の月と見る云撰集抄曰一行平中納言とくく入在そくく身よりやまつ事侍りて須磨の浦は流され藻蓋られつ浦つらみあつき侍りし繪島の浦もかづきとる

登人の中ふ世の心よしう侍りたるふたより給ひく何所よやととと入より  
尋ひ給ふよ此海人よりいふも

あつ波のよとる渚よ世とまきき海士の子あれば宿も定めばとよみ  
まぎれぬ中納言つとがかあう愛つて涙もくれぬ人給ふはとん波のよるひ  
かられて月やどれも濡ひも心有る袂を波よ波く袖のうら月と  
かきよ一馴一面影その濡衣とがききて舟の中あて世と送る海士の中も  
かき情の類ひも侍りたりと愛へて珠よあられは侍り寄げよゆうお侍り  
按て本朝烈女傳も載て繪島と播磨の標一書されども是非あり同く海つたれあれば  
惑へるあう

本朝烈女傳繪嶋海女頌曰

黃門行平 忽起心兵 戲言出思 和歌發情

不邪不淫 有才有名 繪島風韻 全非鄭聲

千載 播磨の頃磨の月よ空まへ繪島は雪うりせり 前參親陸

同 春霞繪島は崎とあえつきは浪のかくも見へる今朝哉 藤原重綱

同 さよ千鳥うけるの浦よ音信く繪島は磯お月傾ふきぬ 藤原宗基

新勅撰 湊山ととふふく潮風ふるはの松は波やかくらむ 後徳寺左大臣

續古今 明石ぐと繪島とけり見りてせは霞の上も沖津あは浪 皇太后宮大夫 俊成

難波津の風の心のかよひてや繪島が磯の浪もかくらむ 頓阿法師

衆妙 又つはよ曇りもくもよる波の白きと後の繪島もくらむ 玄音

幽齋紀行 繪島と入磯と見るふ山の重りて嶋のられは

幾重とも波強きふたふみあはれとまきあはの繪島あはむ

山口敏樹の云按て此哥は巨勢金剛能山と重置く画くこと故本より

源至鏡公 墨拈や遠き繪島の夕かす

同 松よ雪白きと後の繪島はうか

つゆはれどつぐとられど波むすむ画くは磯の春の明りの 荷田東磨

扶桑名勝詩集

赤石八景 雪後 鳶幽凝 遠望 猶如 設色 有餘 粧 弘文院 林學士

覆醬集 泊繪寫記所觀

此時吟了湘江暮乍霽描成蘇氏堂

傍岸米船聚隔江茅屋連漁兒爭餌釣樵婦采薇還

石川丈山

黃麥登山麓青苗長澗田爰無風浪患島裏一壺天

岩屋古城 繪島の岡の方あり繪島の岡の古城とも云本丸高廿七間許縦五十間横四十間北の九級廿間横六十三間本丸より二間許低し其余三方平地あり古松繁茂し本丸の南ニ抜穴あり其深きと云ふ

陰徳太平記卷五十四 岩屋城夜合戦之條

岩屋國の在應菅平右衛門同新右衛門父子去年毛利家小忠志深重なる  
依り先年より岩屋の城に兒玉内藏太夫と入置給ひたる所如何ある者舌  
頭を翻しりる菅父子逆意と狹り兒玉と討べき用意とて巷説りり  
或人かゝと告知せり兒玉大驚き抑當國の者ハ先年より三好が為不  
祖ぐといへども菅父子が一心堅固ある故こそ當城と守りし身倚頼る  
菅父子が及心りし終りてや吾小勢と以り一日半時も争う此地は足と駐ひ  
一旦立去り重く大軍と以り菅父子と退治とて一とて竊は舟を取來り

藝州より逃下り云云のよと申り糶元驚きまひえ春隆景へ此事

有りてと評定りりこれハ兩將同多の假令菅父子及逆の心りり

も近年當家の所有と成り岩屋の城と捨置ん事ハ勇智の足りり

似たり一特小大坂傳への要路なれば是非に就き其まに棄てべき小

あはれ誰れ彼地を蕪り菅父子と押へ一國と引受り忠貞と守るべしと議

せられれども其精選の器に當る者なく又誰進み出り馳向んと申者

あそありりこれ爰に香川左三門尉廣景熟と思惟りり蟠根錯節は

非れハ其利と見びと云て以時岩屋の城へ籠り菅父子と一戦りりこそ勇の

程も顯り諸人の中み超越せり忠義も見ゆられ哀れ彼所は渡らるや

とん思ひこれと手勢三百騎は過げ此勢あり力たり如何せんと思ひりり

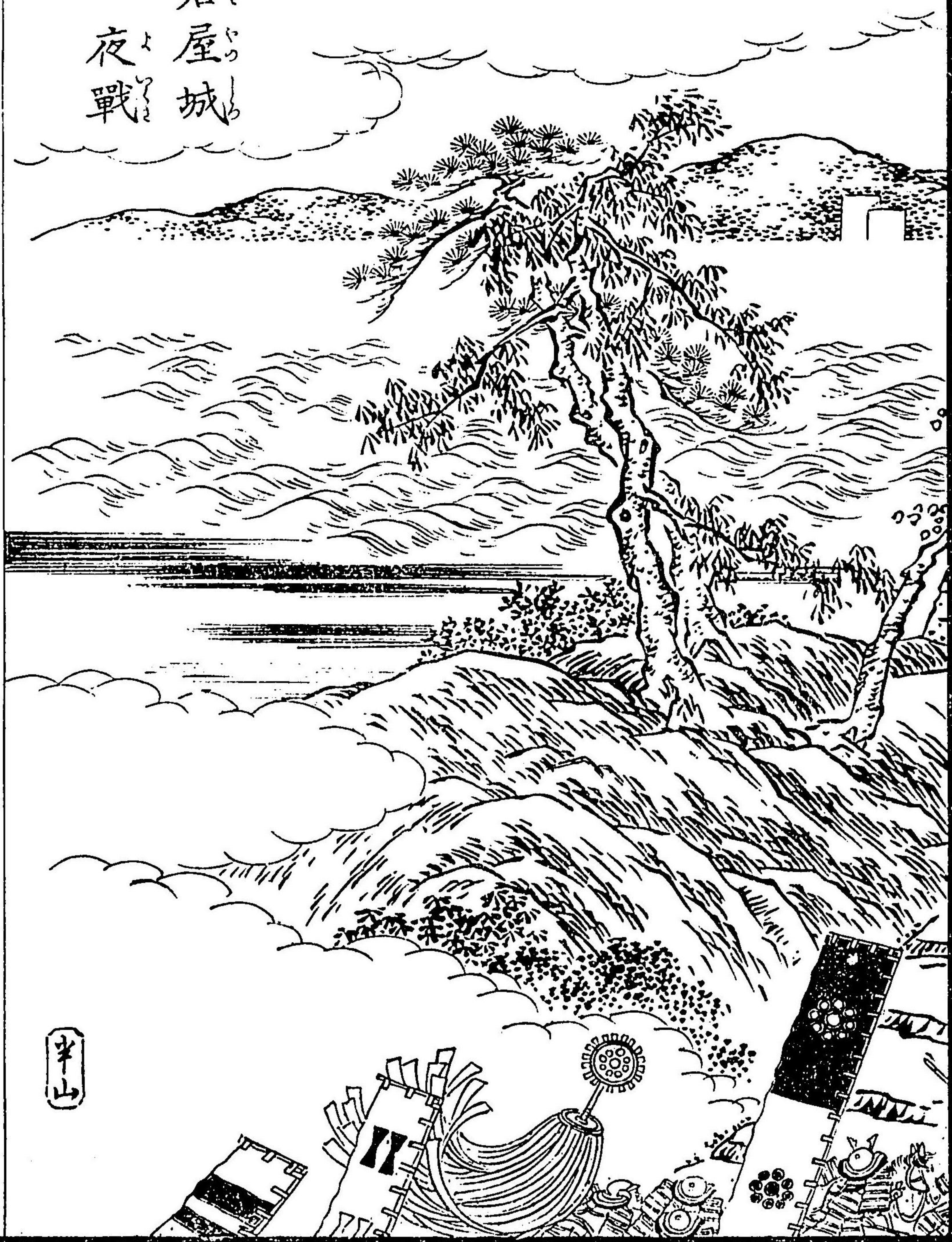
従子の冷泉民部大輔が館へ赴き吾斯々思案と極めて候へども小勢ある故

かかひ難くと語りり民部ハ天文の末大内義隆卿に從り長門の大寧寺

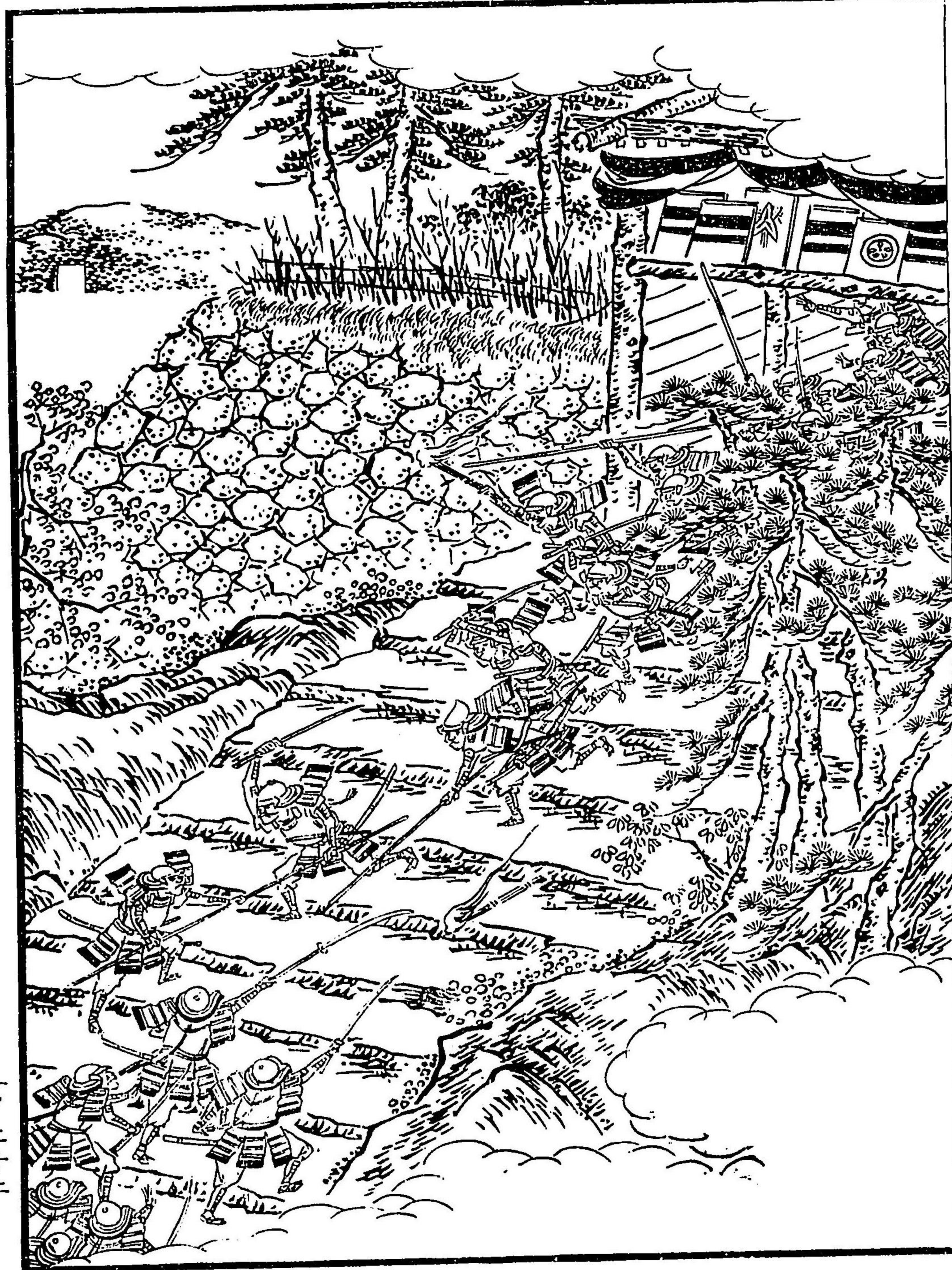
小於り大勇と顯り判官隆豊が子ありこれハ父は考らね至剛の士



岩屋城  
夜戦



半山



一、二十二

かりりり間髪を閉より快く笑悦し吾も此程御邊一般の所存と抱  
候ひし事も小勢ある事と顧み胸襟の向よの展卷せしが相り啐啄同時  
底の機ありいぞ打連く彼地を渡へしとて此由想えへ申されば國中小誰  
一人として進む者無所は兩人身命と顧み楯籠るべきよと望む事最忠  
勤の至ありと大に感ずるひ頼り二人と召出し對面ありければ兩人申るの  
斯此方より望申は上の淡洲の敵は一入付て合國初の如く御手小属せしめ  
ぞんば再度より歸り候ふと荒涼の詞を吐き退座して已は舟に乗んとする時  
忽ち菅父子が許より使者を以て申する何者の言為候ふや人某甲子中國と  
背き信長が一味仕るのよ一兒玉との例にて御敵國候ふ其時節をけりぬり  
この候ひは罷出く身の過りあきまると申断るべき候ふは忍び御立退候ひ  
つる故かつ承知する候ひは某甲身不肖は候ふは一日御味方小来り  
候ふ上の争う或心と懐きまると全く野心と存せざる支證候ふと鍾愛の女と人質  
として差下りたる是よとて香川冷泉も安堵の思ひとあり岩屋の城へ上りたるに

菅父子弥志深ううれは淡路一國は敢て下知は應せぬ者こそ無りされ讃別  
香川義景も一家とのひ兼く中國一味とのひ此時兵糧あて送りたり其後或時  
天王寺より佐久間が郎等共一千餘人兵船は取乘淡路押渡り夜半岩屋の  
後ある山より切入り入り香川廣景の敵ありと妻も知らずれば何とやん今  
宵の物騒しとて城中の夜廻りして自身役所く小油断をかかと下知を加へられ  
この敵と此と見付一番取合せ僅二十人許と一の木戸は下降つて鎗を以て  
扣き立追拂えんと敵一度の追崩されしも小勢ありと見取返して切て  
蒐りしとて香川が中間は源右衛門との入大力の剛者を取直散く射る  
同郎等江戸三郎左衛門芥川七郎右衛門服鎗と合せ江戸の肩先芥川の左の足と  
突とくれは廣景も已は危く見し所は冷泉民部時の声も驚きと鎧取て肩小  
打懸三十人許とて馳来り鬘直は突て出する間敵忽ち立られて磯際遠く  
引去り香川冷泉跡と慕ふ追かけ十四五人討取られ敵は命生ると希有  
めし皆舟は取乘り天王寺まで歸り此より後の敵のよせらる事も無り

これに兩人よく一國と堅固無事不抜して守城一 天正十年備中高松に於て  
毛利羽柴和睦の後を藝列への取りつる

相傳當城の慶長十五年當國と池田家不賜一 時更ら築き其臣中村主殿助  
以下と差こ一國政と執一めが同十八年分封さるふつ兒由良の成山ふ新城と

築き當城と破壊一彼所は運びくるといふ

大和嶋 同天地太神宮の良一町なる海辺より周九十余間なる大嶋島といふ此島の神冥の  
樹息とさる所ありと言つる山上に登りてのあり頗る奇島なり

大神貫道曰礮取廬嶋 繪島の南ふ一島なり碧巖我々として嶺松窺々なり大和

嶋と名く入唐の歌ふ

天さかひひまの長路は漕られ明石の戸より大和清見也

と詠る此島あり大日本豊秋津洲と産るる胞あるが故は大胞嶋とも呼ぶこ

所の人に向へ昔より魔所ありと言傳へ恐れ登る人ありし申傳ふといや人

跡たつる清地は登りて枝修行せむと首の雷符とけ腰の龍泉と佩

とびら先達されば人あり我若らと危石と踏む薜蘿と攀つて絶頂ふ

到て大山祇神と祭り奉りぬ云

水無瀬山 大和島に去ること十間なり西にあり一書に妹背山と云  
古書に淡島の名所六景の内水無瀬山と出せり此所ありん

八幡祠 同村の中央より乾の方長淡より天地明神の祭祀は神薬に渡所あり  
一説に當所の城主安宅紀伊守康盛此社を創建せり

別當坊 同浦より真言宗秀光山觀音寺と号し當浦諸社の別當職あり  
本寺十二面觀世音長一尺六寸弘法大師作と云

當寺不明徳の年号と勅せし金口ありと先年賊の為は失ひりしが寛文四年十月

養宜の山中より掘りて是も岩屋別當坊とあり今此寺小珍藏と

往昔當寺小猛犬あり日毎泉列塚へ行と常と然るに此犬彼地をわれば

諸犬あつれ縮めて尾を下げ平伏人見一奇と然れども何故日々往返

とるや其由縁とあはれとある時此犬塚に至るに海を渡らんとする先諸

木を流し試る左海の方流るとして潮時とあつて槎に乗るその

一潮は渡りて今傳へ別當坊の犬の作りし時ふればとて別當坊

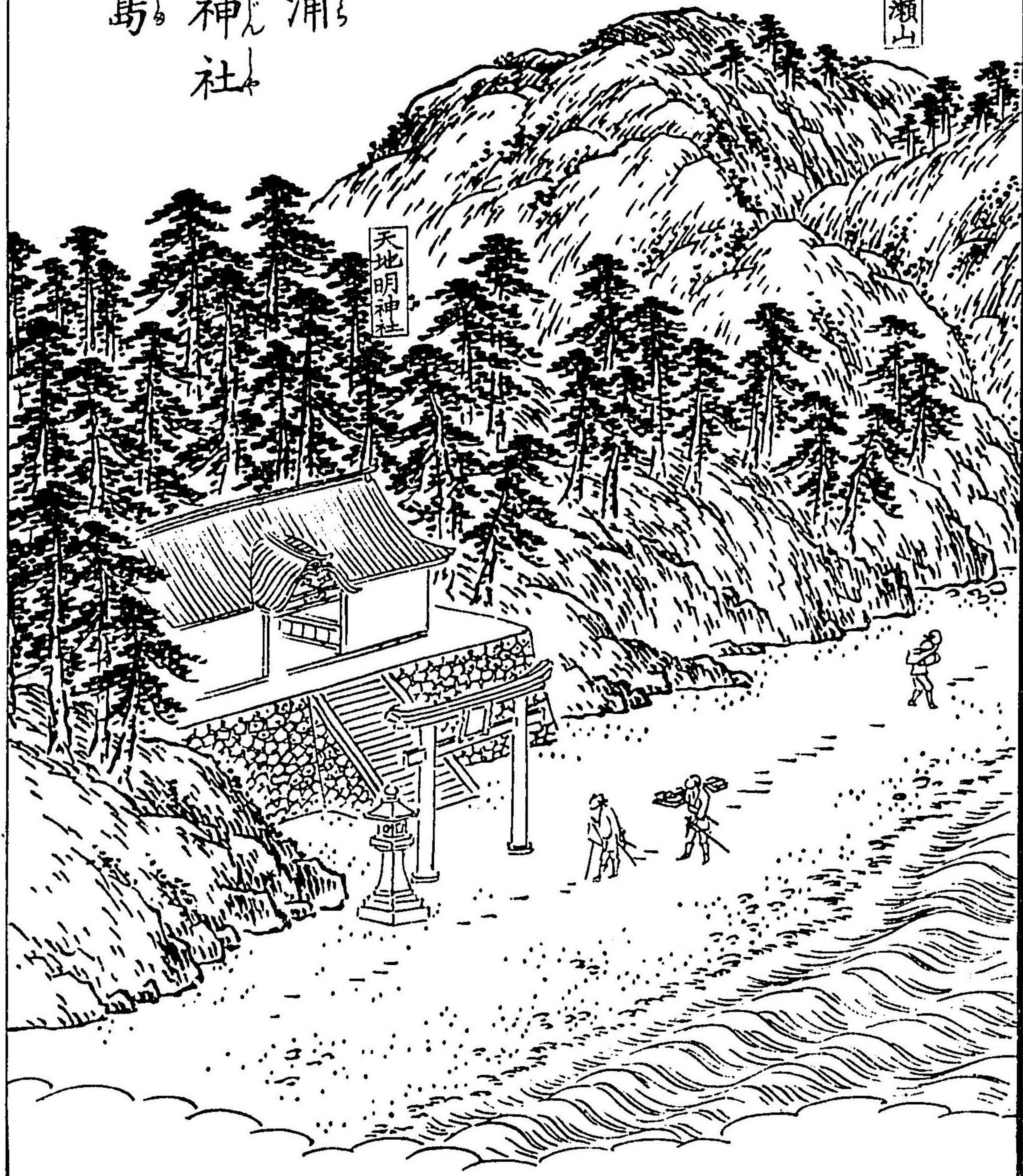
と号くとて此潮塚浦へ行潮條あり其水勢つと此汐は入る船舵の力も

及むびし一方小引れ行とつり 常磐草

大和島  
岩屋神社  
岩屋浦

水無瀬山

天地明神社



岩屋古城

大和島

半山

一望千里一  
扁舟高掛征  
帆過淡州逆  
風洄波曾不  
起天風吹送  
海門秋  
石川犬山

水品山 八幡宮の後手南向の高嶺にて岩石松樹相連り峻し希く黒白二品の水晶生れといふ

開鏡山観音寺 岩屋の浦里の坤にあり本寺正観音當國順札の札所第三十三番に真言宗

開鏡山 岩屋の南の溪間より攀躋り行くと三十町をり右観音堂のあり所より山上に登り眺望され松尾崎より須磨明石見へるとり海山の景氣をくづる美観あり

山口敏樹云此の古昔烽火とあけ古跡ありて按る浦廣明石一渡船の相番より烽火の淡辺より烟と軍事の急と告るわは烽火とあけ

松帆浦 同所より後入三原郡慶野の松原の浦と以て専ら松帆の浦とあはれとも古人の詠吟せし

常磐草曰岩屋の浦の北辺の海濱に今松尾崎といふ所より西列へ上り下りの

海船常小舟と繫ぎて風と待親しく觀る所あり磯山に生列る松の緑波より

清く須廣明石眼前ふあり風景うつろひ所あり松尾の尾の帆の訛あり

松帆とつらる時俗小帆と尾と通呼して和訓の音便かゝる故あり此所の

名ふより物名に被らるる岩屋の浦と松帆の浦といふあり繪島の浦と

いと同義あり松尾崎の西に並り江崎村とつらり是も江の繪の轉訛と繪

嶋が崎の略称あり皆岩屋瀬海の惣名ありと知るべし

万葉 神龜三年丙寅秋九月十五日幸於播磨國印南野時

笠朝臣金村作歌一首

名寸隅乃船瀬從所見淡路島松帆乃浦雨朝名藝雨玉藻苅管  
暮菜寸二藻塩焼乍海未通女有跡者雖聞見雨將去餘四能無  
者丈夫之情者梨荷手弱女乃念多和美手徘徊吾者衣戀流船  
梶雄名三

新勅撰 未ぬ人とす帆の浦の夕影ぎ小焼やりの身もあられつ 定家

大木 淡路嶋松帆の浦は焼塩ののろくも人とらるるあはれ哉 為家

幽齋法印九州道記曰 天正十五年筑紫より歸りのかたれくる時の道の記あり

高砂の浦より松帆の浦見物せんとて七月廿二日の曉夜船漕よせり行ふ明石の

追風と片帆よりけくると淡路島より

行舟の追風きあふ明石より片帆は月をむけてきんね

さて松帆の浦近くあれは舟とよせ見ふ明石の月浪は浮ひてくると

あつ吹松帆の浦霧をれて波よりあつむ有明の月

お帆浦

今歌  
お帆浦

お帆浦の

岸

よもぎ

よもぎ

よもぎ

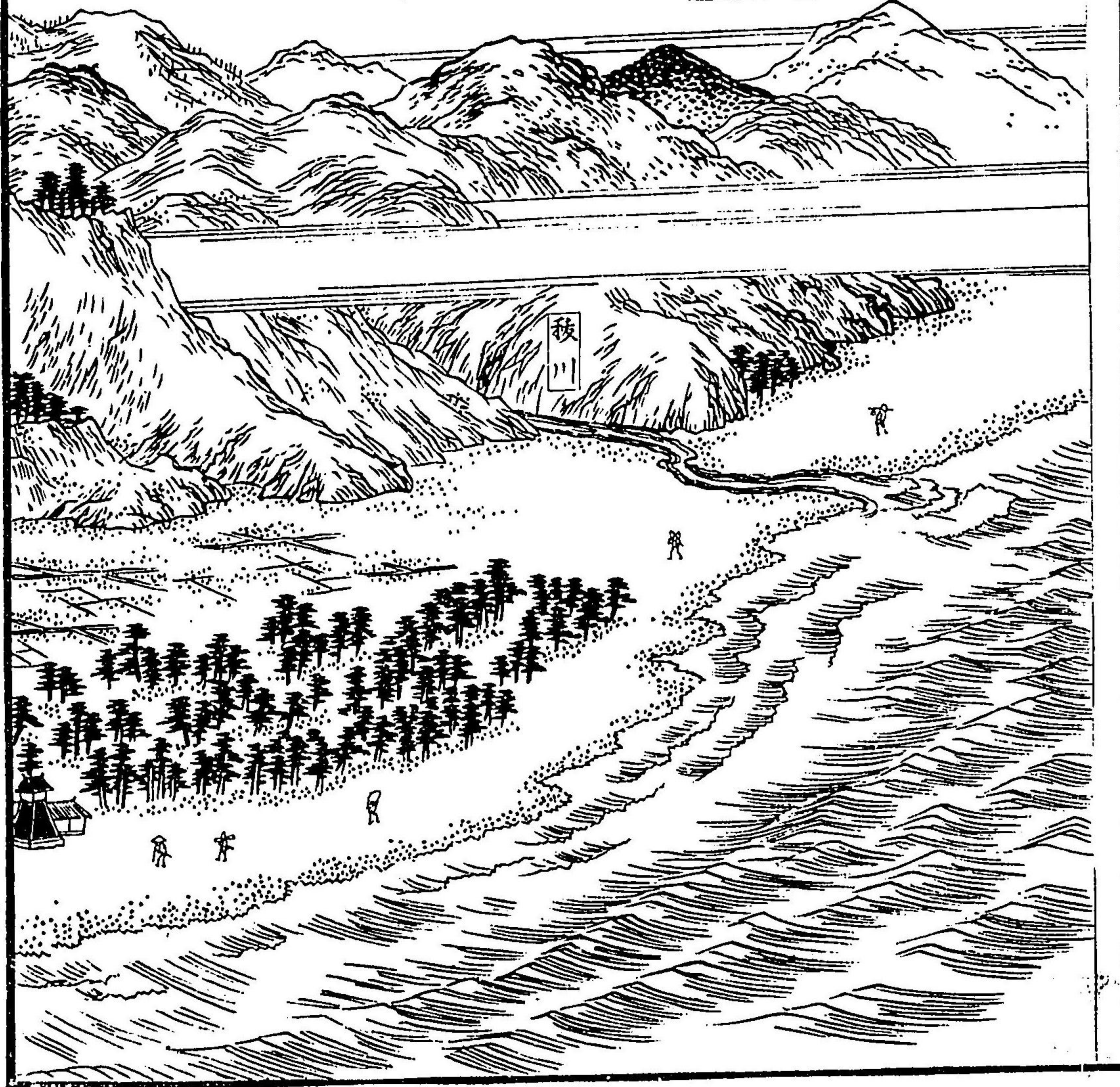
朗

大

町

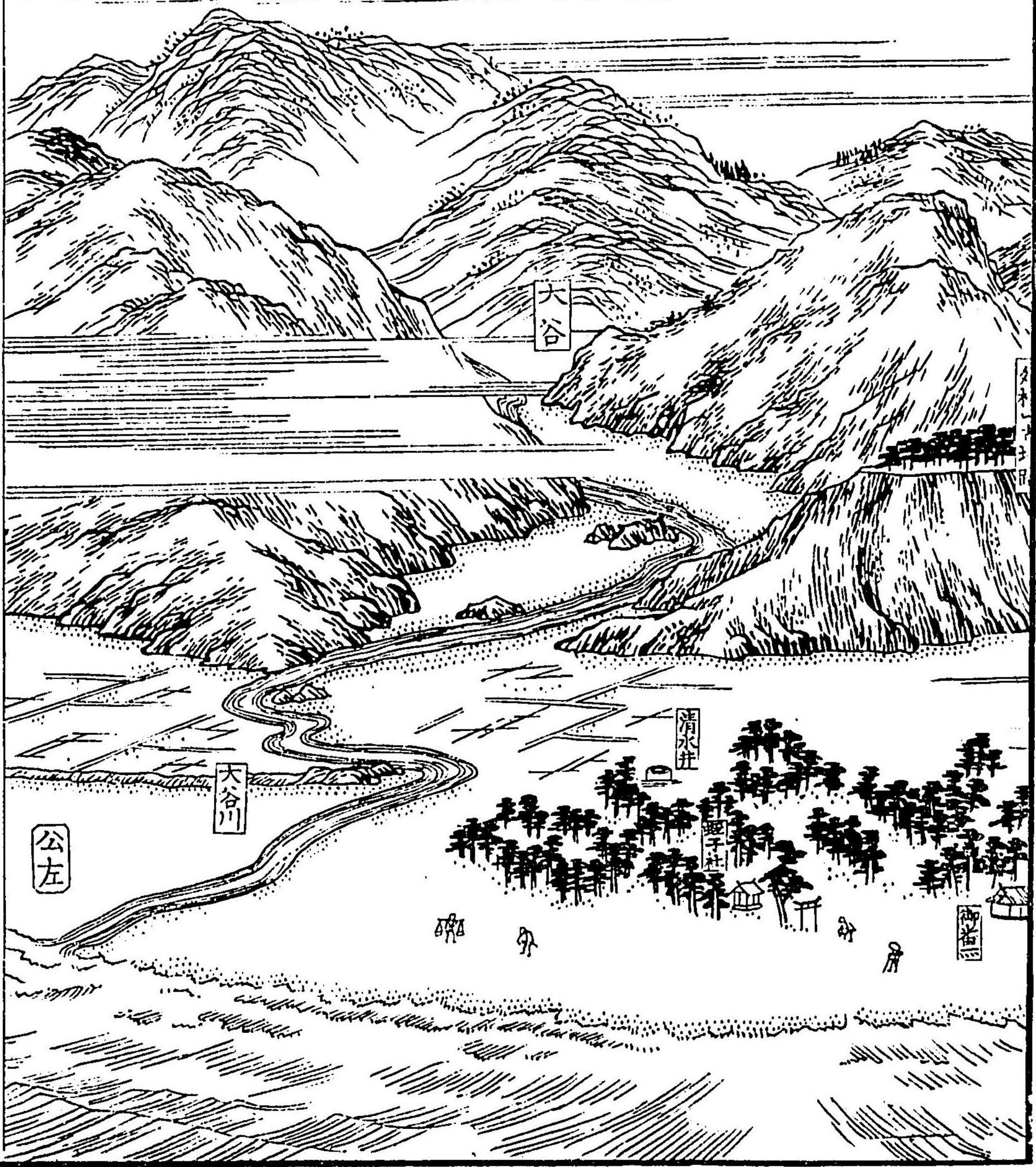
小夜千鳥

百舟



一  
二  
七

一  
ふ  
ふ  
そ  
や  
お  
帆  
浦  
夕  
時  
白  
鼎  
左



公左

在廳實春館舍 松帆の浦有と云今其跡未詳 鎌倉實記云琵琶法師の傳曰在廳の中大宮古藏人実春は淡路國松帆の浦に居り是は平氏に背者又実春は淡路國者義久の弟あり云

宰相法師古趾 松帆の浦より未詳

往昔四條さうらふ中納言右衛門督の子息侍従の君といふ美童あり十四の年北山の花見の折のう岩倉の何某の坊ある三十どりの宰相の法師といふ人侍従の君と見あてよう終るころあれ中とあり三とせが程も馴むひが時の相國の御子の殿あ侍従の君と懸想し給ひ志を思ひと通し給へぬ入ありし後宰相の法師の有由ありと怒りの命り相國の威ひふさう宰相と松帆の浦は流され侍従の君はこれとて嘆き伊豫の法師といふと伴ひあひびく淡路の國は暮ひ下りひくさ宰相松帆の浦みく既死し後ありれば深くも愁ひみ況し終は剃髪して高野山に赴きよし松帆物語に見へり此書四巻あり古代の物也  
松帆物語曰岩屋といふ浦よつとぬ云 云松帆の浦と申らんは渡らせ給ふと京あて聞へば先其浦と尋ねる繪島が磯の向ひありし申は若君岡多ひて京極中納言の焼やりの詠ありしと此浦の事や身のあがれぬも理りぞ

うと思ふ扱其日ハ此浦と尋ねく此彼は休む暮る程は時雨ちりしく降る浪の音高し海士の家居のく何方とらりとも覺へぬは灯の光のうよ見ゆ夫とあづけ行ハ板膏の堂あり海士の笠屋は宿らんよりん友あこそかどと言ふ尋ねる傍は小庵あり立より見れば松の葉ふもべく老僧ひとり對ひつるあづけ案内申さんと人乾びる声とて誰そといふ是は津の國の方不者あり四國へ渡らんとする便の舟をかれて惑ひ侍あり此御堂の傍は雨やどりせまやしく侍ありあどり怪しくや覺へん立出て灯明の光り小見ふやつしたれども此若君と九ありびや見えんか最惜かと言ふ庵の内へよび入ぬれれげ小住ありたり達摩大師の画像一幅けり助老蒲團麻の衾ぞり打置たり暫し物語あどり彼人の向後とほりやれど打つけられ言ひて此若君といひと見て怪し都方の人とぞ座まらん我も昔都ののありたどりの年人とやまら車ゆりて京も住む侍も頼み髪切りて江湖山林ふりれ歩きて年経えづりたりあり縁ありり斯る漁屋の隣とて紫鴛白鷗と友りり三十余の

年と送り侍でぬるあど語りもつれあれあどが夫と便りあき此流され人の事と問  
られつれの松帆の浦ふる人侍ア一此身ごうよう此嶋へうつり給ひありとつ  
委く語り多へ岡すやき故つことつが松帆の浦より此庵まき常ふりつりあひつ  
都の方の意ききあど語りあひるが殿上人の御事とく明暮意あれまき心  
思ふことと隔つことと語あひあり其想ひあ侍りえんか地まきひまひが  
日ぐふ重であひく此庵へも渡あま附あひまも人も見へびつれみ見え  
く日と隔てびまうり扱ひ一程は終あかたうあひぬ今日七日ふかん成あ一煙  
あしとつことと此僧一侍ア一と語りふ岡あち物も覚へび低ぶり泣き  
ぬ此僧りあく借あつりあきことと座まきああど言ひく我も打あえりう稍つて  
伊豫の法師申くる今までの包も侍まとも彼人をも失あひぬる上り世小憚りも  
是こと意あまあひ一と言ふ殿上人よ斯やき山賤あか奉るも道の程の  
目と思ふゆえりつりあきと余つり給ひく後の事あどまき認めるひる  
あらびこの乗るまきあどつり老僧のひるるへ彼人つりまものともあふむの

程つりご一と言ひく小き法華經念珠あど給まきとて取どく見平性  
半あれ給ひ一ものもあれの弥目もつり許あつ又巻あど細くあま  
なる文の上は四條殿へとて青侍の名書つりつり見も今端のきく小宜便りつ  
如此たつひ奉れこのまひ一さうは慥はまら侍りつり時困き見うた若君の令  
侍後の君の方へあか一都と出りよう此島は住りのうさぬつりうの際近き  
さまあど書つりあつり鳥のちとのやう小見也  
くや一きんやぐく消へん憂身とも知ぬ別れの道芝の露  
なごやうあど侍りつり有一夜彼須たつりの夢も今い思ひ合せつれてつ  
哀れあつつとめく此僧とあまら松帆の浦へ行光此程す給ひ一庵の  
さぬとんまは浅まきげふまらあひ傾きく松の柱竹の垣も皆朽あつらぬつ  
此は月日と過し給へんと思ふも悲し叔少隔りく松の一村つり所は疎あつ塚  
つり標の松一めと植つると是あき侍りと申せば立りつり轉びつりぞ伊豫の  
法師もあれつり彼王褒が柏樹あつりつり是も涙は枯や一あつりつりぞ

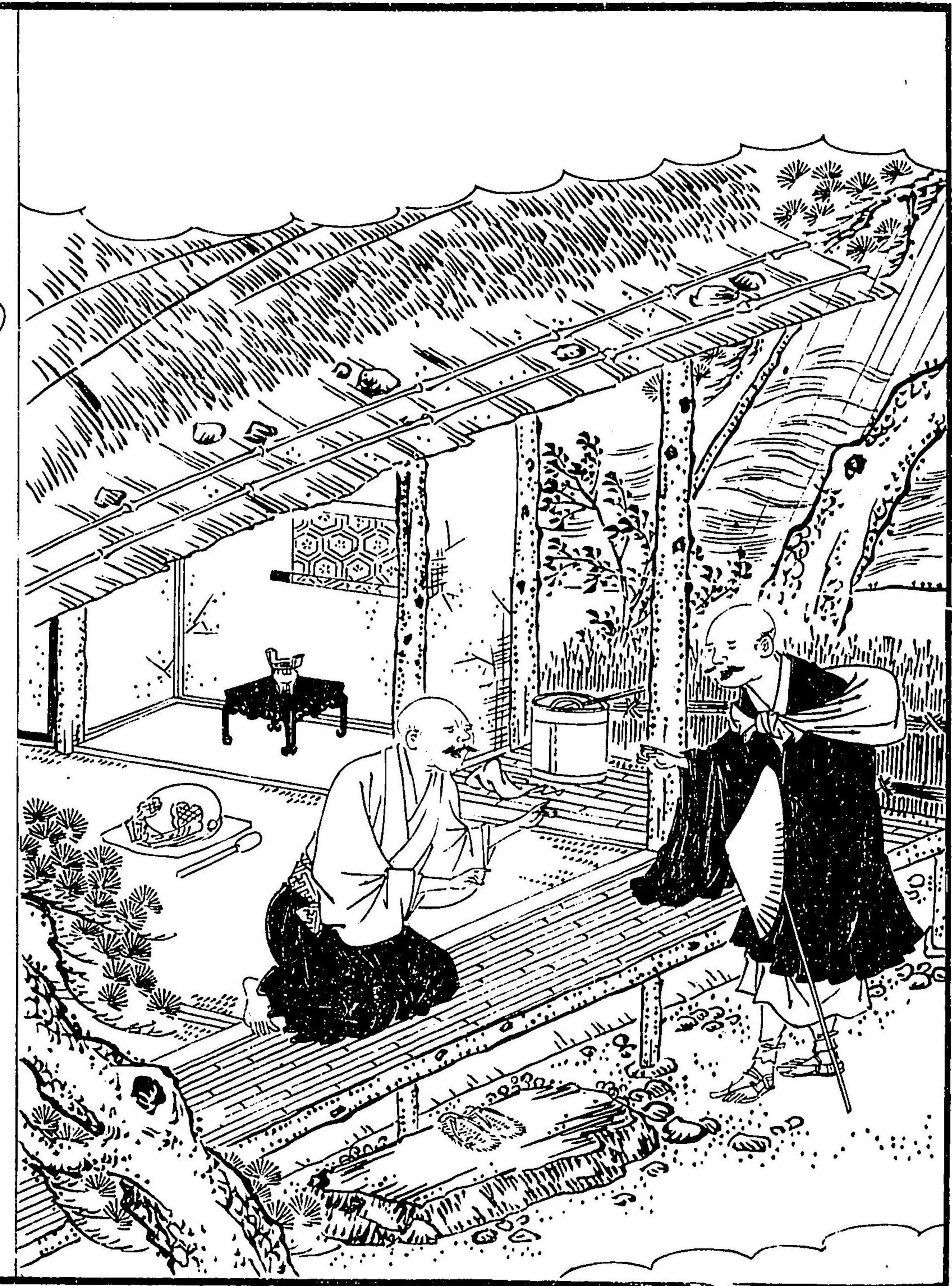


侍従君松  
帆の浦小  
宰相法師と  
尋ぬ



半山

一八三十一





龍松 同松尾崎の近き海辺より、恰も龍蛇の如くありしが、今枯れ其古趾のあり惜しむ。

里老曰龍松の頗る大樹の古松あり、巖に纏ひ蟠屈する事活龍の勢ひありて、古枝頭角の如く厚皮鱗甲小似たり、実も希代の名木なりしが、安永六年の秋より漸く枯れ、終つて朽果ぬ惜べき事あり。

一説は即伽造子とり、草紙は終路は千貫松とて名木ありの事と載り、未ださる松を削りて、此龍松とすの事あり。

榎川 榎川に作ら松帆の松林より三町余、榎川に長松林の清水井、同社の井向より南より、坤の方より江等村の境あり。

組板山古城趾 榎帆の松林の上より、此山赤壁急、数年砂を、絶頂の平地崩れ、今も存存、甚けり、登りて、雑、城地の後手は、大なる切石と許す積り。

一説は源平争戦の時大宮藏人實春居住、實記、永禄の頃安宅紀伊守宗景在城、南海より、押寄安宅と攻破り、當城と衆取といふ。

大谷川 古城の後の山の惣名と大谷といひ、此大谷の一曲輪の谷水合して古城の東は流れ出松帆の、松林の東より海より。

鳥帽子岩谷 大谷川の奥消辺より、六七町あり、高き四間余の岩の上より、五尺余の立鳥帽子の形に似たり、此地は、関作左門より、海賊の大將と、物産き所あり。

女夫岩 江等の高嶺より、貝石、此浦の産、月の形せし者あり。

名馬生月出生之地 同鏡の住の農夫善兵衛の家あり、云往昔佐々木四郎高綱が源頼朝より拜領せし生月といふ、馬は此より出ると言つて、鳥崎の巖窟 鳥崎の岸より、楠木といひ、街道の傍より、二の窟凡深き五間或八間往來の、岩屋と楠木の境あり、水源は西より、境の谷に落ち、

赤崎 楠木村別野の、黒岩鼻、同村海辺あり、鳥帽子岩、同村海辺より、其形梨子打鳥帽子に似たり、安永の頃半石の形を失ふといふ、

潮清水 同村鳥帽子岩の磯より、波を去ると十歩あり、石向の窪とあり、常水二斗あり、溜りて、澄活、水の湧所と、踏み深く、落ち、危く、足の裏甚温ありと云、右所とも温泉の、奇なり、

湯槽蹟 楠木村の濱より、十八九町、川上の山向より、ひり、温泉の、其湯が、このゆとあり、里人、此地で、ある湯合といふ傳云、元文三年正月、十日、湧出大に、流行、一年を、経、廢りといふ、

常磐草曰享保の頃、此所、復温泉湧出、近國の人、来り、集り、浴び、予も、行て、浴せし、寒、冷、甚、き、其後、来り、浴せし、人も、止ぬ、按、温泉水、有、ま、く、覺ゆ、

楠本川 水源、同村の中より、村中を、経て、海へ、入、田中川と、号して、大川あり、

八幡宮 浦村より、磯辺より、岡より、内より、濱より、社頭より、松樹、縦横、あり、茂り、中より、石の、鳥居あり、後の山を、宮山、或は、旗山、といひ、社頭の、地、末馬村の、領ありと云、

本殿 應神天王 拜殿 若宮 本社、左の傍より、仁徳天皇と、祭る、高良社 本社、右の方より、武内大臣と、祭る、

本願寺 同村より、本寺、薬師佛、聖徳太子の、作といひ、真言宗、

同村海辺より、其形梨子打鳥帽子に似たり、安永の頃半石の形を失ふといふ、

同村海辺より、其形梨子打鳥帽子に似たり、安永の頃半石の形を失ふといふ、

同村海辺より、其形梨子打鳥帽子に似たり、安永の頃半石の形を失ふといふ、

同村海辺より、其形梨子打鳥帽子に似たり、安永の頃半石の形を失ふといふ、

同村海辺より、其形梨子打鳥帽子に似たり、安永の頃半石の形を失ふといふ、

荒道宮 高良の社也 姫太神社 若宮ニ 經藏 本地堂 本社の下段の北ニあり

御供所 拜殿の北並ニ 鐘堂 同南ニ 隨身門 岩屋街道の傍ニあり 菅神社 街道の傍濱の方ニあり

例祭 正月十五日 的矢の神事あり 船玉社 同向あり

福龍寺 松林山と号し往昔如意坊ト云とぞ 本寺釈迦佛 真言宗 八幡宮の別當ニ同村あり

汐濱古趾 八幡松林の下北の端より官道大川までの海濱にて今も地名を汐濱と号し

古城蹟 同村より城の土居より傳説ニ城ニ即左門居城の古跡ト云或ハ正井將監の城地とも云高サ同半上平地 三十八間ニ二十五間中段七間又十間五間の櫓跡下段三十間二十三間其餘平地ニ古墟アリ

向殿古廓 右城の土居より辰の方一町をとりより 向井將監の居廓ト云

一説ニ太平記項二階堂將監某居城あり 所領壹万三千石餘家老正井彈正俊久の

廓ハ白山村ニ有とりの或云城土居の主正井某繁栄の時其家族此地ニ別居居城の

土居向ひあり故向殿と称はとある

高凡三間許の丘あり四方竹木繁茂 上の段の平地十五間二十三間中の段十四間ニ八間 下の段長サ四十間あり

浦川 水源仁井山田河内の中より出づ白山村を經て浦村に至り

白山権現社 白山村ニあり里人此地と権現山号し如賀國白山権現と勧請はとあり 例祭 正月十七日の矢の神事あり

當山の近境一の圓山あり頂上ホ本社拜殿あり松杉四面ニ繁茂とこれと覆ふ 岩壁巖風と立ちたる如く神境の遠近ニ十二の攝社あり所々社あり所々各々名あり 石の鳥居ハ元禄十二年浪花瓦町某寄附より所ありつやハ此所ニ當社と勧請 神号と以て白山村と号し他郷より農民五六戸より住てより後世 漸ハ其末業ひろがり今一村と名をとりとぞ 來馬郷之遺趾 今ハ郷廢し來馬村ニ名をとり

和名類聚抄曰 淡路國津名郡來馬 久留 萬

伊勢久留麻神社 岩屋街道の傍田圃の中あり延喜式ニ出 神官田村某

延喜式神名帳曰 淡路國津名郡伊勢來留麻神社

一説ニ祭神大己貴尊とつゝ例祭九月十五日翌十六日神事相撲あり

或云伊勢國奄藝郡久留真神社 延喜式ニ 伊勢國より勧請 せらるるべし 則ち此社の名と以て郷名と稱めのあるべし

一書ニ伊勢國の久留真神社ハ所祭兵服織姫ト云 又云麻と植そり神を阿列

一書ニ伊勢國の久留真神社ハ所祭兵服織姫ト云 又云麻と植そり神を阿列

旗山八幡宮

一説云此地と浦村と  
の松帆の浦のつぎに  
旧八幡の浦村と  
浦村と後世畧  
ト云



麻殖郡も同神なり若比留女尊ありといふ

西念寺 同村より赤馬の神社の別當職之本宮阿弥陀佛并薬師佛と安ん薬師巡の礼所之真言宗

假屋浦 末馬村につく海辺の浦里に則ち岩屋街道あり上品寺 勝福寺 潮音寺ホ寺院あり

下田浦 假屋につく下田村より下田坊より人口蓮宗寺あり

釜口浦 下田のつき釜口村より 釜口溪 水源諸野の山中より 岩屋街道あり 出合流一海入

三立崎 或は御太刀崎とも云釜口村津田の海浜より故津田の端とも云 妙勝寺の山と三立山とつらつら名づくもあらず

八幡宮 釜口村より當野の生主神より例永二月十六日 八月十五日 社僧宮坊別當妙勝寺

本殿 應神天皇 若宮 高良祠 本殿の 神輿庫 本宮の 經堂 本殿の

當社八幡太神の御像の僧形ありとぞ是は空海宇佐の宮へ系籠の時出現ありし

御像あり山城國高雄山神護寺に藏ひし所と同じと寺記に云々

妙勝寺 釜口村より月の山の比方より三立山といふ日蓮宗之當寺の門下村中ニ四院あり

傳云足利尊氏將軍西國へ赴く時船と釜口へ泊む然るに山上に燈火の光

なるを見へれば其所と問ふ里人妙勝寺と答ふ尊氏妙勝寺の名あり妙なり

勝と取の字ありて軍勝は元前兆ありと屢々いひ給ひて則ち崖より上りて寺に

詣りて太刀一振と寄附せられと云 又當寺略縁起云

先年三立山と言ひて御太刀と改め申事尊氏將軍新田義貞と數度合戦の時建武

二年乙亥春義貞の爲ふ尊氏卿士卒ありて敗北兵庫の浦より大友等加勢の

舟に打乗り一度西國へ下向の初風順ありて船進みかた此浦に御船と繫ぎ

大將尊氏兵と士卒當山に集結あり此寺の宗旨本山寺号如何と御尋ひ有し時

當職の住院申すは宗吉の法華宗本山の洛陽具足山妙顯寺寺号の妙勝寺と

申上り尊氏卿も臣下ゆりも右の寺号と思ひ合され夫法花經諸餘怨

敵皆悉摧滅とあり又衆怨悉退散と有る實に釈迦本師の宗旨なり殊に本山

妙顯寺の洛陽の祈禱所より則末寺あり妙勝の字殆是軍陣の吉例あり

尤謀向の合戦ふたつに必定一戦の間は妙勝事疑ひあり何ぞ猶豫ありん

最早明運の時近りと御悦喜あり則ち系籠ありて御太刀と寄附あり

又臣下の諸將も心々武具と納め勝利の程と祈らるるが介後義貞正成

一味の官軍悉く討亡し四海泰平の治め給ひぬ依之當寺と御祈禱所と  
ありありの釜口の庄と悉く寄附せしれ愈天下安全の祈禱丹誠と抽ん  
執行せしむべき旨あり永代不易山林竹木軍役ホの諸役と免され御教書と  
下し置了夫より三立山と改め御太刀山と号し今に至る當山の衆徒  
天下静謐の御祈禱念とあり執行せしむと之  
太平記建武三年二月八日尊氏卿兵庫と没落し筑紫に赴き給ふと  
時の事あり又尊氏既京の後願書と籠らうとつゝ其書曰

天下静謐祈禱事殊に精誠の状如此

延文二年二月廿九日

妙勝寺院主

尊氏

○又願書あり云

此城妙勝寺御祈禱弥に精誠候恐と謹言

十月十日

尚書 卷 判

妙勝寺領約

里人傳云此書ハ釜口の城主より籠らうの願書と云

常盤草

尚春ハ細川淡路守源尚春あり淡路守護養宜大土居の主第六世と成春といふ  
文明十七年小卒去り尚春ハ成春の子あり明應中成相社の棟札ハ淡路守尚春と  
有其頃三好一族五畿南海近國ハ威と振る淡路の地士も皆三好ハ属故尚春  
其寇と避り出奔し釜口ハ籠城せしあり  
一説小郡家中村の城主田村修理進村春の弟長助尚春釜口ハ在城と此人あり乎と云

禁制

妙勝寺

一當手軍勢方甲乙人濫妨狼藉事

一剪採山林竹木事

一放火事

右條々堅任停止訖若於遠犯輩志速ヲ私處嚴科者也仍如件

永祿十三年二月日

本系進橋

又の禁書一通ニ淡路國三立崎庄十有元龜三年十二月日右京進入道條々の文辭ハ右同ノ畧之三立崎ハ則ち妙勝寺の東の嶺と云

名産豆豉 右妙勝寺ニ製ハ頗る佳品あり世ニ妙勝寺納豆又ハ釜口納豆ト号シ例年公ニ献上ス云

古城蹟 同村陣屋と云ハ阿の東の方ニ一段低き平地なり南北十二間東西廿間許又一段海の方下テ平地南北十二間東西四十間余の所なり

當城蹟ハ兩方山嶽我々ト聳ヘ頗る物凄き幽地あり地名ト阿文字ト云

一説ニ細川尚春もさく小據一わん平或云菅加賀守元重居住於ト云

無漆山清水寺 同村後の山ニあり本々親世音と安ハ當國順礼の礼所ニ

月山清光寺 同村月の山ニあり本々親世音ハ當國順礼の礼所ニ街道より登リテ十九丁頗る峻き高山あり

月山牧 山中ニ馬と放ち

城山 同村の西北ニあり上段の平地縦十三間横八間許下段縦五間横十五間許近辺ニ東城あり

鍛冶屋谷 大田の池の上手山の尾ニあり八幡の社頭より

曆應の頃淡路來と稱シ名鍛冶の住居セ所ニ尊氏卿船と留ミ妙勝寺小入り時ニ此鍛冶ニ命ジ名刀と鍛リてりニと旧此出崎と三立等と書

國安 住淡洲津名郡三立崎ニ稱淡路來或曰淡路坊來國久之智也

伯州ニ同人あり又此人大和ニ住居シ大和國來國女とも打テり是ハひぐさ鍛ニせり

鍛工譜云淡路國鍛國安後醍醐天皇時人也號淡路來

重國 二男 ダンチ坊ト稱又代名ニ按淡路坊あり

國安 文和年中越前國雀千代是也

義國 一作善國ニ曆應ノ頃也又文和年中ニ云又重國同人ニ云

○異本ニ義國ヲ父トシ重國ヲ子ト云○又此重國ハ信國ガ弟子也ト記セシ書アリ

重次 千代雀越前末ト云

淡路坊ノ二男カ不分明

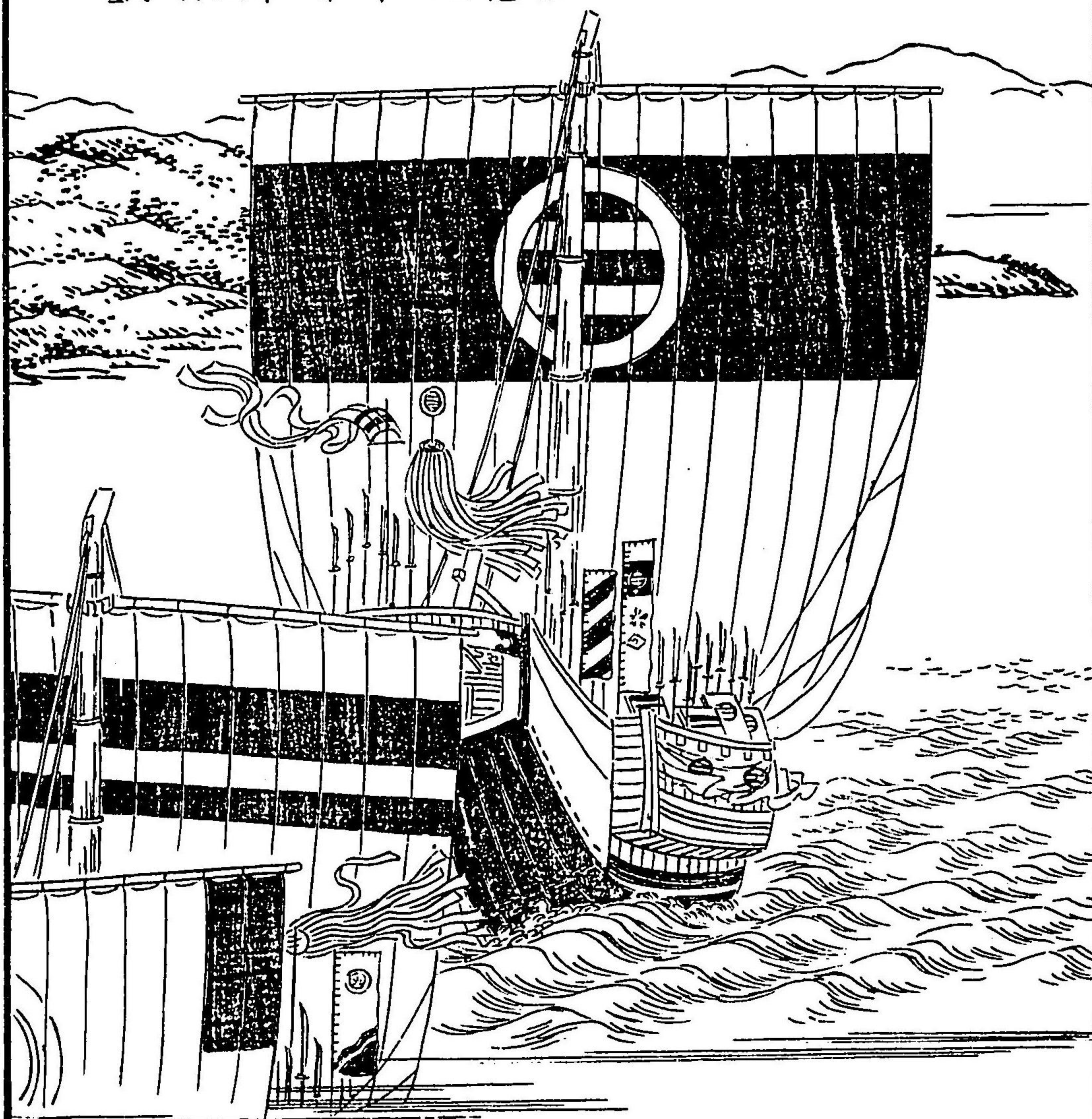


足利尊氏金口の  
浦の妙勝寺と  
向ふ

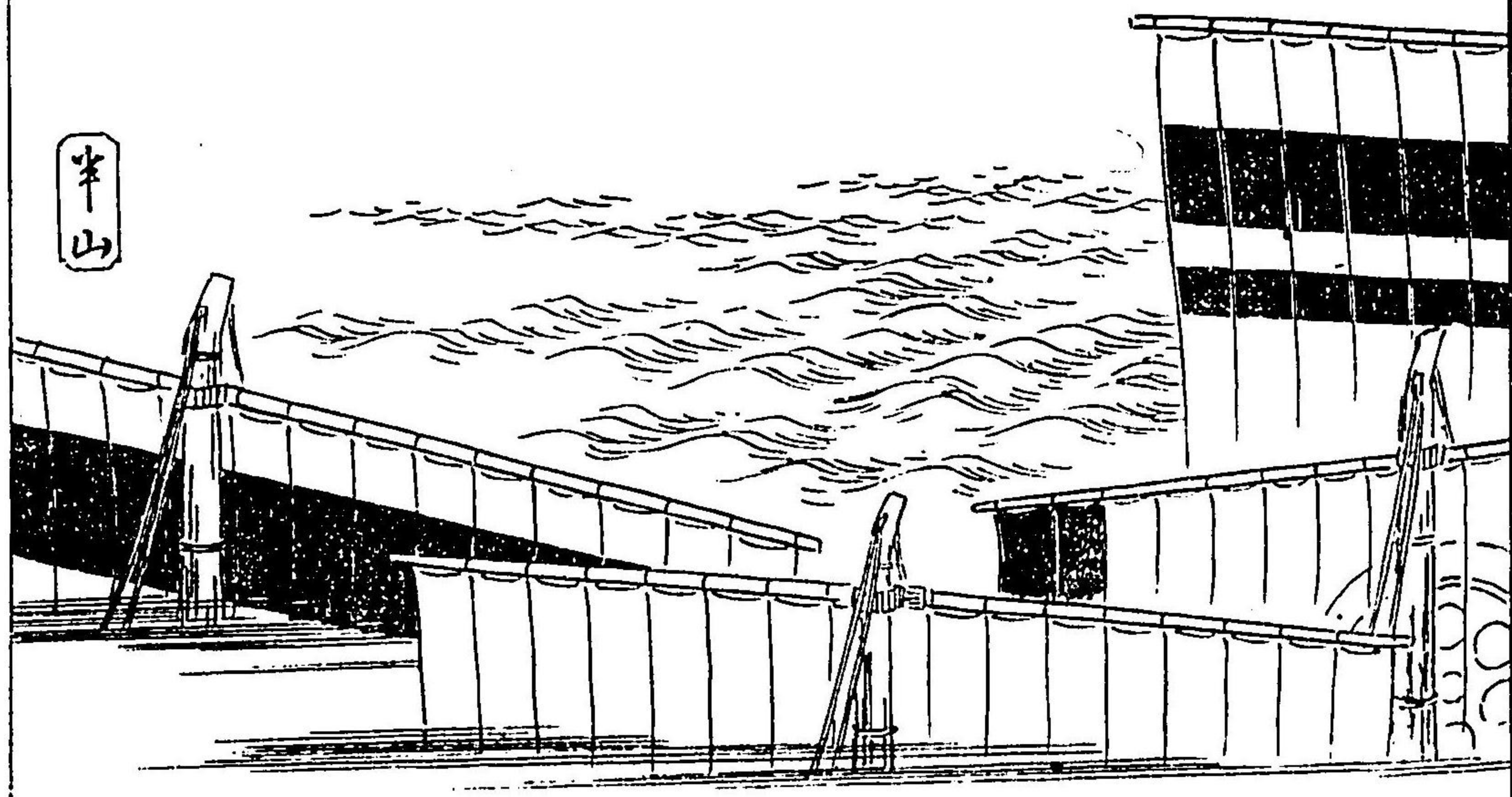
初夏遊妙勝寺  
録舊製

南浦

縹渺對門連浦煙  
東南晴景遠帆懸  
洋中軍艦認燈夜  
山上法堂留釵年  
樹竹陰通樵徑暗  
巖花色映衲衣鮮  
日長懷古情無限  
聽取溪風送杜鵑



半山



蠣岩 同村の西南蛸岩谷高山の半腹にうり地名とサウサト云又井手とも云高サ八間余方四間蛸貝の付るゆふ昔

錢神原 同村八幡社の南街道西の方壹反許の原に傳云往昔此地は除夜は光物に切ると切ると

卒塔婆原 地名あり方六間許此所へひり大賢僧正法華宗と弘ゆんと當州に渡り先此村に來り此所を

高神子山 同村の西にあり高山あり直立して其高き三百十餘間絶頂より四方と望む小先山より高き事凡

村老云四月八日午刻此頂上へ登りて安座を爲し四方を雲あり日の空中より花

降る事譬へ小米花の如し俗民これと切利天より降りたる天花云

御館 同村の地名あり里正菅氏の東門前の畑に或下原とも傳云一官家の上鶴の所へ流罪

猪隈谷古墳 井形と妙勝寺の間の小谷にあり高三尺許古碑及び古木の根とあり碑文不明又塚の

陣屋 來馬河内の境の山にあり平地の丘の廣サ南北八間東西四十間許の平地四方の山を眼下あり相傳

責落せし凡十三町なりと云此所より猪隈の古城形なり

小田將監古城 小田村にあり地名の略云小田將監は淡列の七人衆の二あり足利の末世に居住せり或へ河上將監とも稱し

佐野浦 釜江の浦に佐野村あり一説は狹野の轉文あり云々此辺りと佐野の庄とのひて山城國賀茂社の

一説は古書に云狹野の神武天皇の諱あり諸國に傳れり此社にあり夫と必らひ

狹野と号し其村名を稱し有る事あり音便は紛誤り山王とせり

僻言あり諸國に斯謬る事又多しと云云行餘隨筆も此事を載し

今此旧跡と尋ねるふ其事あり又山王と謬まるともあり惜むべき云

此地より松葉薪の類を多く出諸國に運送し又牛蒡薯蕷天蓼獨活麥

等他郷に勝れ佳品あり名産と云

佐野が寄 柴能の端 同村の濱にあり 森が端 同村の

佐野八幡宮 同村にあり祭神應神天皇根社あり若宮高良末社あり四社明神ホと祭る神興會社日廣

先三月別當八幡寺の鳥居の傍にあり本宮阿弥陀佛と安久平松山と号し真言宗

例は八月十五日神興渡御あり御旅所八幡寺の西に隣り當社の石清水と勸請はと云

圓成寺 同村にあり村長の宅地より十三丁あり山中あり慈雲山と号し本堂鐘樓あり銅瓦とて背り

本尊 聖觀音立像

二軀同尊秘佛ニ  
弘法大師作ト云

金毘羅祠

本堂右傍ニ  
石祠ニ

鐘堂

本堂の向ニ

榎原薬師堂

同村ニ有テ藤原朝實盛の灵と云フ  
此寺佐野生徳結衆九院の一也  
今廢ニ  
僅の堂宇と存ル

明和二年上の山

石像の薬師と掘出セリ  
今堂の上ニ安置ス  
或云當寺薬師の詠  
乎と考テ向ハ石像

見ヘテ然モ此掘出セリ石佛ハ  
ソノ本尊アリ

實盛祠

同村ニ有テ藤原朝實盛の灵と云フ  
此寺佐野生徳結衆九院の一也  
今廢ニ  
僅の堂宇と存ル

所ノ種守の神と祭リ箱虫と  
除クこと祈ラレリ

牛石

同村ニ有テ云山の裾の海濱ニ有リ  
大黒の像アリ

辨財天祠

同村小田の前の上ニ有リ

奥隆寺

奥隆寺村ニ有リ蓮臺山と号ス  
本寺十一面觀世音長一尺餘本堂小並ビ  
草庵アリ  
寺記詳アリ

何者滝

奥隆寺川と稱ス  
本邑の海濱ニ有リ  
三十五丁ニ有リ  
奥ニ有リ  
寺記詳アリ

前之滝

或ハ蛇窟ト云  
何者滝より十町許流の末ニ有リ  
兩岸聳ヘ下ア  
樹木繁茂  
物凄ク  
昔此淵より虹の光り有リ  
禪師ニ有リ  
樹木繁茂  
物凄ク

法蓮淵

今も早天の時節ニ有リ  
法師ニ有リ  
杖と以テ  
淵の水と動ク  
心カ  
駭ラレリ

生徳浦

佐野村ニ有リ  
此浦は生徳の庄と号ス  
所アリ  
昔田園ニ有リ  
佐野の庄生徳の庄  
二箇の庄ハ賀茂の神領ニ有リ  
地ニ有リ  
今尚賀茂の神庫ニ有リ  
山下文詳ニ

山口陸齋曰

天保某年の春京師賀茂の直兄翁  
松田伊  
徳島より招キ  
應ル  
門人詮之  
二人

下られ  
時路  
渡  
来り  
道の行  
ふ  
徳  
と  
所  
や  
つ  
向  
浦  
里  
の  
人

知者  
あり  
たま  
或  
人  
文字  
の  
つ  
書  
と  
り  
直  
兄  
翁  
の  
曰  
生  
徳  
と  
書  
て  
有  
と  
り

夫  
の  
生  
徳  
の  
浦  
の  
事  
あり  
彼  
方  
より  
尋  
ね  
給  
へ  
答  
ふ  
叔  
父  
より  
わ  
か  
り  
老  
人  
と  
頼  
り

尋  
ね  
る  
中  
内  
村  
の  
氏  
神  
ニ  
尋  
ね  
ら  
れ  
り  
此  
祭  
神  
又  
社  
の  
造  
ら  
れ  
り  
考  
へ  
見  
る  
全  
く

上  
賀  
茂  
の  
社  
と  
換  
り  
て  
勧  
請  
せ  
り  
物  
あり  
上  
古  
より  
賀  
茂  
の  
競  
馬  
生  
徳  
の  
庄  
より

競  
馬  
の  
料  
の  
馬  
一  
疋  
と  
仕  
立  
出  
し  
る  
事  
あり  
有  
り  
が  
世  
乱  
レ  
星  
霜  
と  
経  
て  
今  
の  
其  
事

絶  
え  
れ  
ど  
今  
も  
五  
月  
五  
日  
の  
競  
馬  
生  
徳  
と  
号  
す  
り  
の  
第  
四  
番  
目  
の  
馬  
ふ  
り  
入  
り

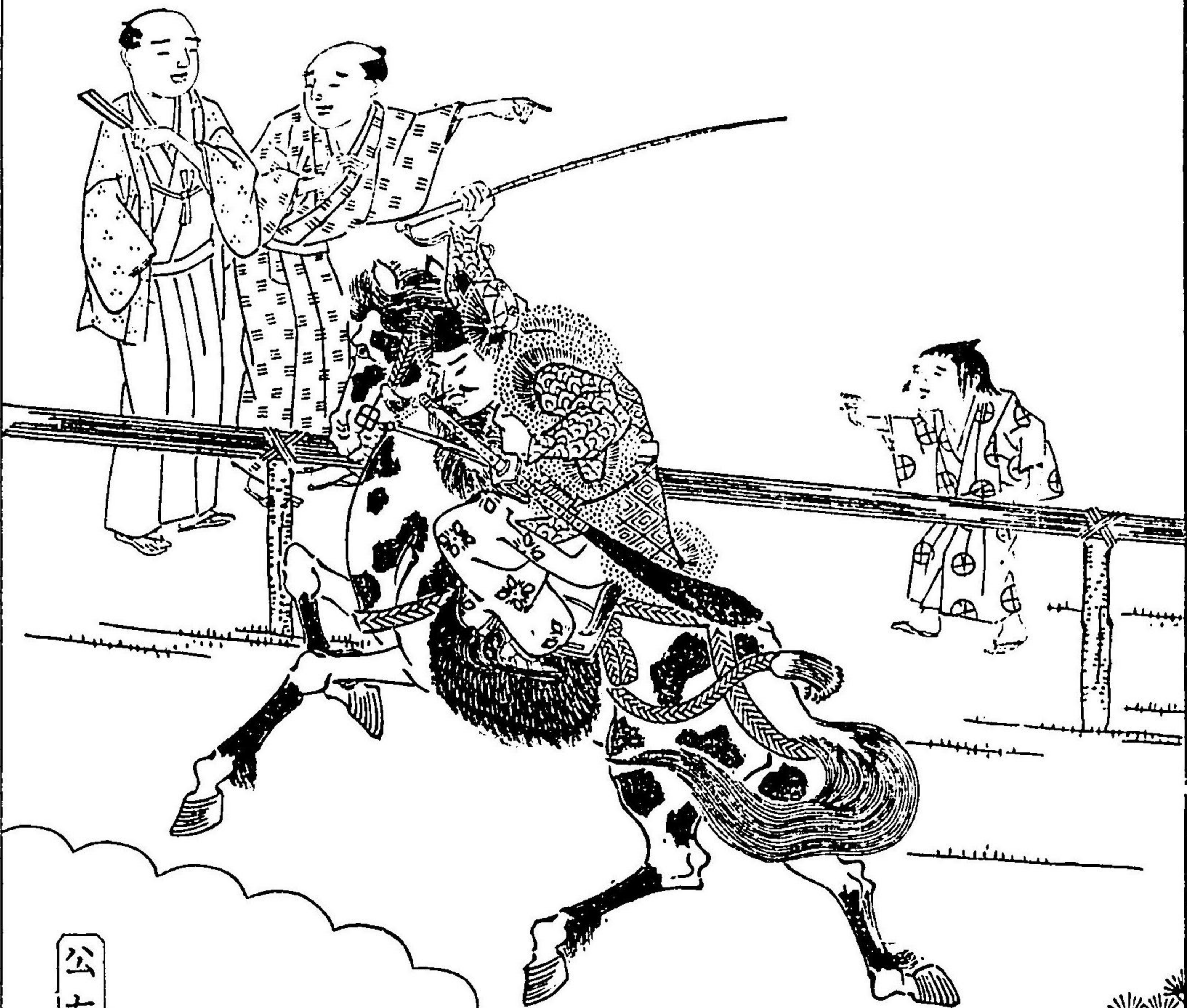
此  
賀  
茂  
の  
神  
庫  
の  
記  
録  
ニ  
精  
一  
蓋  
賀  
茂  
の  
神  
領  
古  
ハ  
諸  
國  
ニ  
並  
園  
も  
多  
う  
り

夫  
の  
生  
徳  
の  
庄  
も  
其  
神  
領  
の  
内  
に  
有  
り  
彼  
競  
馬  
の  
料  
の  
馬  
も  
仕  
立  
出  
せ  
り  
あり  
年  
來  
此  
事

い  
づ  
か  
り  
今  
生  
徳  
路  
ニ  
来  
つ  
て  
始  
め  
り  
其  
所  
と

い  
づ  
か  
り  
今  
生  
徳  
路  
ニ  
来  
つ  
て  
始  
め  
り  
其  
所  
と

往昔淡路国佐野生穂の  
 西并八皇都賀茂の神領  
 一々例年競馬の神事  
 其料の馬一疋と比地より進  
 一とぞ今も尚競馬の式  
 第四番目の馬と淡路と  
 柘とるよん是をん正  
 一往昔の送風  
 す  
 四



公左



一  
四  
十一

上賀茂のさぬ有る上古の名残とみづら見へ神さび殊勝ある事ありと堅らふ  
感涙と催しぬを直兄翁かく語られて其後飯京あり神庫の記録とらし  
予小贈られ也 山口氏ハ淡路国三原郡福良浦の人  
名之謙字、君亨、号ス或ハ南浦ト云  
賀茂神庫記録御下文 山城国賀茂社ニ

下 諸國

可早、任院廳御下文、停止方々、狼籍、偷進  
神事用途、加茂別雷社、御領庄園、事

淡路國 佐野庄 生德庄 此余諸國の名目ハ畧之神領の國ノ都合  
二十四國あり、庄園四十二ヶ所ニ

上畧 右四十二箇所、神領任院廳御下文

停止方々、狼籍、武士等、濫效、如元可  
偷進神事用途、若、不、恐、神、威、不、用、院  
宜、慥、可、處、重、科、之、狀、如、件、以、下

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣 御判

○又足利鹿苑院殿の御時右の趣、遠有べし、旨、御下知、仰出され、御判とせしと云

應永五年二月日

奉行飯尾加賀入道

管領神主豊久

○右神領の事、詳々、天正の末、諸國の神領も、遠朱、今、丹波播磨備前  
あいに、残、有、又、佐野生德の二箇の庄、最馬所あると、以、古ハ  
逸物の早馬、小鞍の飾、あ、競馬の料、進、

競馬ハ、當初内裏の武徳殿、馬場殿、行、五穀成就、天下泰平の  
御祈禱の、堀河院の寛治七年より、加茂の社、附、諸國の馬所へ  
其用途、寄、例年の神事、ハ、

因ニ、當淡路國、育、馬、凡、草、韃、履、各、素、足、あり、尤  
國中、石、高、あり、地、形、あり、一、歳、の、駒、の、時

よりして素足すあしに馴なれるものありて適怪とくけが我あそとれば踏ふみと履はきき事ことあまじき  
馴なれざる事こと又馬うまのへつゝ嫌きらふより里人りじん語ことばをり

**生穂川** 水原野田尾の山中より出づ生穂より海入

**四社明神祠** 中内村より此辺の生土神と俗に白鬚社といふ社僧榮玄寺石階の下の方なり

**本社四座** 祭神 賀茂皇太神宮 貴布祢明神 春日明神 白鬚明神 以上よりせり

**撰社** 本殿の左右列に 神供所 神輿庫 鐘堂等本社の右あり

いへ此邊と凡て生穂の庄とらるなりて前より加茂直兄翁の此神社と拜  
して自ら上加茂の形勢りて上古の名残見へて神まび殊勝しゆしやうある事感あはれり

**例祭正月十六日** 神事 二月十九日 大祭 三月三日 五月五日

**淨土寺** 同村より覚王山と号し其言宗本寺五智佛恵心僧都の作と云

**高瀧寺** 同村の中央長谷川原の山潤より宝珠山と号し又摩尼山とも云旧名ハ圓明寺といふ

**本尊 薬師如来** 二尺許 座像長 當国薬師巡拜の礼所 脇士 不動明王 共ニ弘法大師作ト云

**經墳松** 同寺の南ハ圓山より此絶頂ニ古松ありて

**瀑布** 寺の乾より東向高五間より上下ニ淵あり下の滝を五尺許東の岨ニ小堂ありて不動と安ん

**西明寺** 同村より智光山と号し本寺正観音當国観音頓礼の第廿八番札所あり

**經墳松** 同村淨土寺のしらの峯より密珠山の經塚と相對し長谷川原よりの流れ其中と東流

**拜石** 同村と遠田村の境並村の脊より平石山向より二尺許横一尺八寸許厚サ三寸余古石碑の

**投石** 同村長沢の村境並村の中より大石あり其故詳あり

**古城趾** 同村の南大谷村近境より海濱と去りて七丁許平地ニ所より城主の時曆詳あり

**土居の松** 或ハ神樂依の松とも云四社明神の南大川の端あり明神祭礼神輿渡御の時先此所ニ神輿

**雨乞山** 明神の社の山頭愛宕の表より村民早天ふあ時あり登り詞具突智神と多ありのれハ忽ち

**巫女舞石** 長谷川原の池の堤南山の腹より半間ありの大石四五あり累々昔此池の水と澄ん

感應ありて水と尽さずハ此再修まべりて里民相議し此石上あり

**中内川** 野田尾村の諸水南流れ此村の北金屋といひて所より入り猶南を行る四五丁ありて村の中央

曲流して生穂と中内村の境の向より海入

家集  
 吹まふ  
 山あけ  
 法つら  
 流れし  
 行きて  
 公侍



公左

瀑布

高龍寺

俗名  
 高龍寺  
 不動堂



一八四日

摩耶山重峰寺

新後撰  
山深きすまひ  
むと  
都の松乃  
ゆかとりや  
後嵯峨院



公左

家集

うきやんま  
つねぬ  
あまのこ  
まき  
秋乃山  
為家  
今宵  
夜者も  
あまのこ  
アの声  
流江



東山寺



摩耶山觀音堂 野田尾村より重峯寺と号し當國順礼第七番の札所

本尊 十一面觀世音菩薩 彫り古石の塔の字章明りあり

當山觀自在薩埵の尊像ハ攝洲免原郡摩耶山切利天上寺に比ぶ所の天場小

靈驗特小新あり故に當國三十三所順拜の札所ハ寅の方ハ常隆寺の

峯峩々聳へ成の方ハ東山寺の嶺巍々々三山鼎の如く小岨つ就中常隆寺の

峯抽んで東山寺の山嶺これ小次ぐ

修驗金剛院 摩耶山觀音堂の下の方ハ本堂ニ役行者と安ん木像長三尺許

岡山の清水 同村より佐野の村境ハ僅の平丘ありて松杉繁茂の中ニ石垣の圍ニ面四方許其中ハ

里光の云宝曆の頃此水強く涌出する常ニ十倍ノ現瑞の事ハ近隣の人々此峯ハ

一妻と過り初秋ハつり稍ヤミ其時の

長谷ヶ瀧 同村ニあり或ハ若ヶ瀧ト云中の内村の境川と登テ十五六丁ノ境ハ北ハ屋代谷

水源四池新池堀越谷ニあり佐野村の内奥隆寺山の境ニ瀧ハ南向チチサ五間ハ上ノ瀧下ノ

岩屋の瀧 岩屋谷ニありチサ三間許

屏風岩の谷 岡山の清水の北西向深谷の奥山腹ハ大岩あり三四石相あひて大サヤの 三間余

野田尾川 水源長谷ヶ瀧より出川ニ屈曲ハ村の中央と小より南ハ通ハ

馬石 同村脊戸とつりチサの地の南ハ川中ニ馬の立ラ如き石あり

大谷八幡宮 大谷村より祭神應神天皇本地堂阿弥陀佛と安ん拜殿鐘樓神樂舎馬場先ハ

例祭 六月十五日 此日小麥と以テ酒を造り神前ニ備ヘ糸苜の村民酌テ呑ム小麥造の酒味

野雲菴 同村の中央林ヶ谷の上ニ本尊勢至菩薩長四尺許行基作と云此地眺望の風景ハ

高部虚空藏菴 志筑の境ハ志筑堂地ハ此大谷村ハ屬シ南方ハ眺望ニ志筑の

御旗松 同村大池の東勝示の丘ニ古松あり里人云フ一虚空より旗一流り下リ此松ハ

志筑郷遺趾 津名郡の東ニ志筑の郷ニ志筑の浦

和名類聚抄曰淡路國津名郡志筑 志津 ○按ニ志筑ハ有ハズ

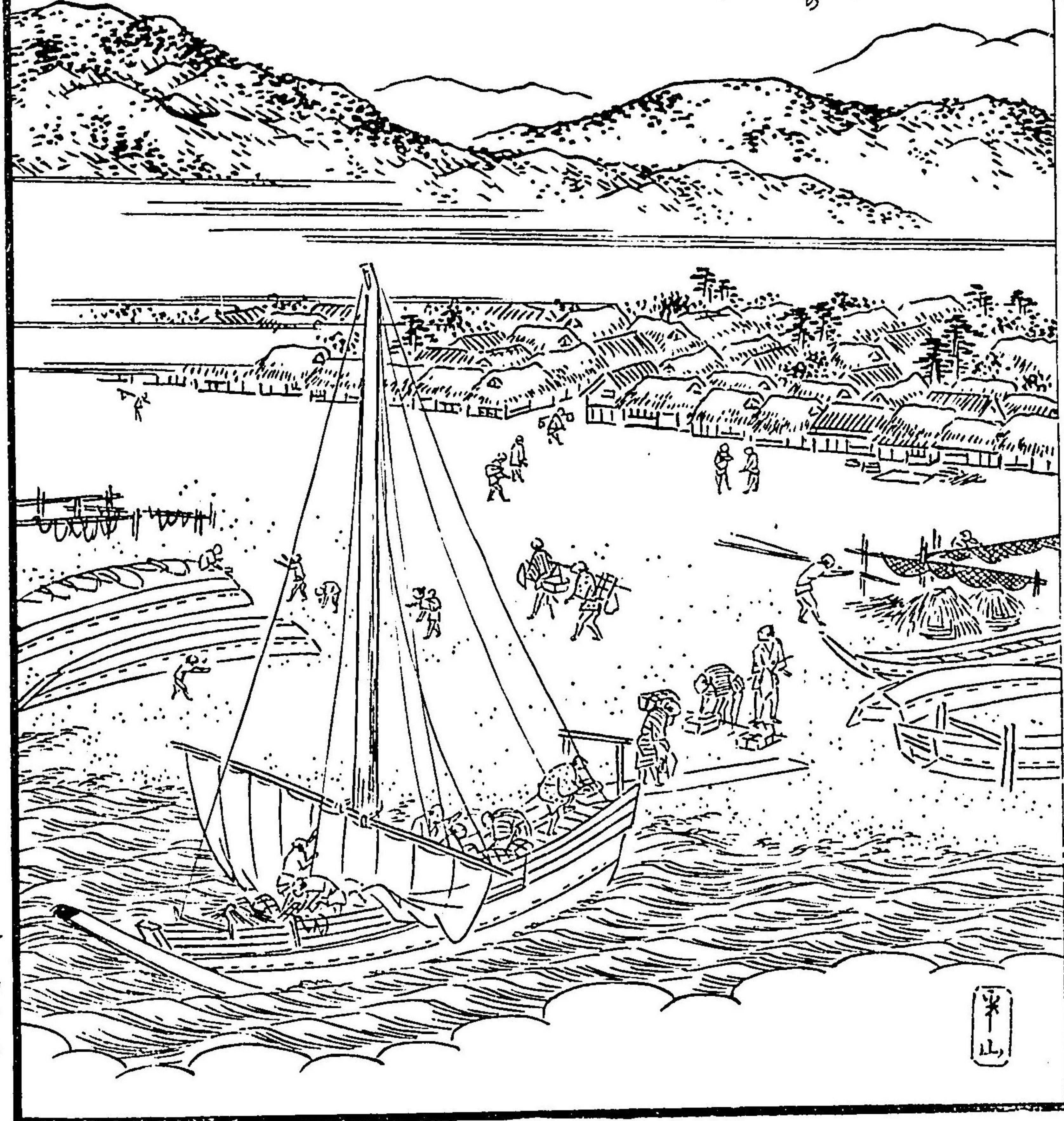
東鑑曰建久三年壬子十二月十四日壬子一條前黃門書狀參着以

亡室遺跡并箇所讓補男女子息為塞將來之乖違去月廿八日

申下 宜上旨訖 云 是平家没官領内 云 淡路國志筑庄 云

志筑浦

當浦より浪花日毎  
 波海の通船つて九  
 地と午の刻のあはれ  
 出帆とる順風の時  
 夕まで晩刻は浪花  
 看り又浪をよりの夜  
 まの刻あはれ登  
 ちのえよりの看  
 こそ程ふ其使  
 年海と死



半山

已上廿箇所先日被奉讓黃門室家

將軍家ノ御妹也ト云

志筑浦 渙戸商家建つれ最繁花の濱あり且日毎小浪華への渡海船

出入り幾内の往返便宜の地あれば賑はれて他は勝たり

名産鱧 援魚勝と製せり其味は美あり此浦は製する故に世人塩辛とて

引攝寺 同浦の中央より吉祥山と号し真言宗本堂方丈間寛永元年忍頂寺氏廣久

本尊 阿弥陀佛 御影堂 本堂の右にあり 鐘樓 堂前

鎮守祠 祇園牛頭天王と 金毘羅祠 寺内にあり

寶什

釋迦出山圖 北殿司筆 竪一丈四尺八寸 横幅五尺

草書慮知論 空海真跡 第三の卷一軸 卷尾に沙門遍照金剛と銘し此卷全部

金紙金泥法華經八軸 卷尾に後光明院殿第七回忌為并鈔法蓮華經八幅書寫

奥之坊 同村街道岡山の上より西国三十三軀の観音の像と安の堂の傍に庵室あり

八幡社 同村より別當八幡寺石階の下より神主 王子村 井内某志筑七社の其一

例祭八月十五日 慶長十七年忍頂寺廣久社檀造修り事棟牘の銘に見ゆ

本殿 應神天皇 撰社 高良明神若宮ホ 拜殿 七間ニ四間シ 本社の前ニあり

神供殿 神典殿と 本地堂 本社の南ニあり 鐘樓 本地堂の傍ニあり 石鳥居 馬場先ニあり

志筑神社 同田井ニあり俗に田井の天神と云又申の宮と稱し例祭三月 八月四月あり申の日と用也 社僧 天神坊 延喜式ニ出世俗菩提神と稱し誤りあり 志筑七社の其一也

祭神 國常立尊 或云少彦名尊

例祭 三月二の申日と用也是と叔時之祭と稱し此日神の小枝ニ寸づつ小切陶器ヲ

入る神前ニ備ふ産子の葦系詣りて供米と此神の枝と一本づつ受て取り家ハ

釣くと例と則邪と避ると云又現井内の家より夜中ニ神の枝と神米と

密ニ尾崎村枯木明神へ備奉る尤其途中より人ニ對面とて禁むとぞ八月の

祭祀ハ初の申の日ニ翌日相撲會あり什物の内ニ静女所持の薙刀一振あり 長五尺余

糺社 同村ニあり山城國下賀茂ニ糺の社あり此神と鎮め祭るあり人乎例祭三月三日と以て行はる 正徳三年本殿再造 寛保元年三月石の鳥居と建ると云 志筑七社の内也

比叡御前社 同村ニあり塩尾の浦境大平村の山の裾と則ち比叡御前と号し此所ニ小祠海面ニ向ふ 石鳥居あり例祭三月三日と以て行はる 志筑七社の内也

圓満寺 同村ニあり匠王山と号し真言宗 當國薬師巡詣第四十七番の靈場也

本尊 藥師如來 長一寸八歩 行基の作と云 稻荷祠 辨財天祠 本堂の傍ニあり

寶什 不動明王像設色一軸 宝山湛海七十四歳の筆也

不動尊 金迦羅 勢多迦木像 各妙澤和尚筆也

畫史曰妙澤和尚諱周澤号龍湫夢窓國師弟子也住天龍寺壽

寧院寫不動像云其靈驗甚多密家特稱妙澤之不動

福田寺 同村ニあり羅漢院と号し本も阿彌陀佛 安阿彌の作也佛ノ下原へけり庵ニ尊信一

源廷尉妾靜墓 同村海濱より十町あり内ニ入る山の裾より北城東西五間南北六間周ニ墮り幅凡一間 余り墓の前ニ石橋と架せり 墓中古塔ニ基あり毎年七月六日夜靜女の忌日とて香花と

供前の石燈臺ニ勒して曰志津賀女除暗暈明

抑靜御前ハ二條帝永万元年生れ其容貌よりく世ニ隠れる兒

美人あり治承三年十五歳ニ源義經公へ仕へ御寵愛の厚かりたり

文治五年義經公奥州へ趣あり一特別のあげと深き頼朝公の御妹君靜

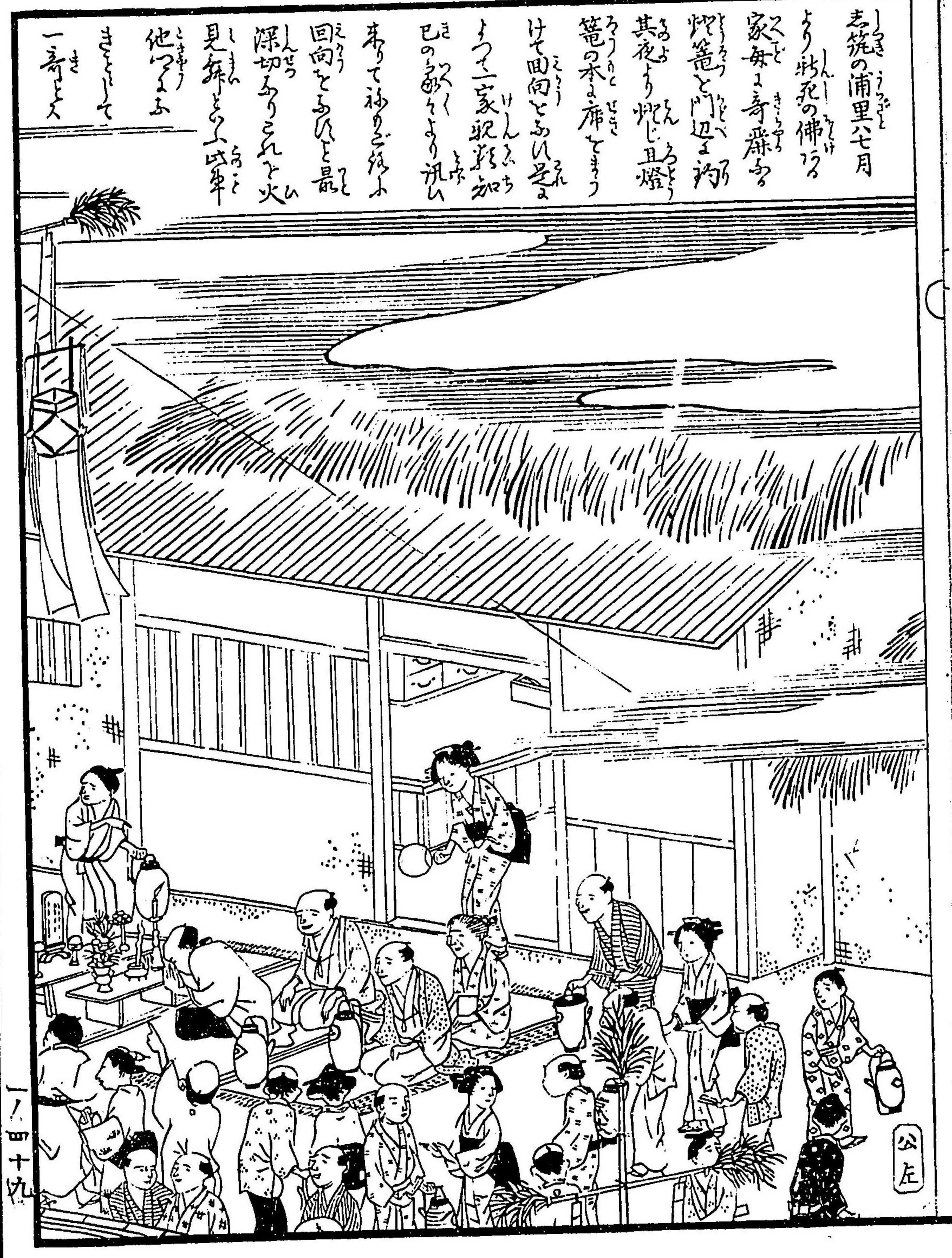
御前と御憐れ有る則ち京都一條權中納言能保卿ニ預けらる其後義經公討

死のより聞へれば靜女剃髮し尼とありて名を再性と改む往昔淡州志筑の

里ハ權中納言能保卿の領知ありければ靜御前此所と閑居の地と定め住り順徳院



甲斐  
夜  
堂  
切  
花  
柳  
亭



志統の浦里七月  
より秋の佛  
家母一奇  
燈籠と門  
其夜より  
籠の本  
けて回  
つて一家  
巴の  
来りて  
回向と  
深切  
見舞  
他  
一奇

建暦元年の冬四十七歳終焉と東鑑志筑の莊に頼朝卿の妹君公家と嫁  
するの領知ありと記し是を以て考ふれば頼朝卿の御妹君の御夫中納言能保の  
領知ありて明白あり慶安年中當地の倉生大良太夫先祖家族の者願望あり  
此墳前一七日通夜せし満ちる曉その靈の移り我は是靜の靈ありと云ふ一丁と  
知れり舞とやひ哥と讀むその哥は云々人ありて靜の塚のふ哀れと  
そつ松風の音と讀み筆と取り是と書り里人大はむらき書記せる所の  
一通と近き所ある極楽寺といふ庵に暫らく置りしは向もかく右庵焼失し  
筆の跡も後世に傳らば諺は曰其舞謡ひの今やうといふ節ありたりと昔  
頼朝卿靜と鎌倉へめられし時雀が岡の八幡とて吉野山峯の白雲とて分り  
入る人の跡を恋きと讀み今様と舞しし皆只人の幸ふはは是と察  
されば實も靜の靈ありて明あり今ふらふ此塚と祈れば縁の遠き人ハ  
良縁と早く結び懐妊の人ハ美人と安産し諸の技藝と達せしめん疑  
か一仍く昔より今に至るまで誰のいぬ者もあらず左は義経の塚と築き石小

靜の塚と云し此所は安置せしむる實ありれある事なりなり又塚の周りに  
堀をめぐらし廟處に不敬せしむる崇めんとこと恐き清くせしめん為  
古よりかくし置りしむり言傳ふる事ども多しとてども幸長  
こればあまこと畧ぼるものあり 天和二壬戌年再刻文化八辛未年  
右縁起は文化八年の春靜女の六百回忌の供養とて此村の福田寺にありて宝物ありて尺帳せしむる  
作りし世に弘ちし  
里老曰慶長年中當村長の婢女物づらひの如く又熱病ありて罵り云  
我は是義経公の妾靜の前が靈あり我墓當村の田井の山下あり年曆と累糸  
と地中埋れ今ハ耕作の糞土に穢され誰有る香水と手向るものは當時  
其田圃の主あるは村長は此由とつけせしめり香華も受んとらふ未だり  
早く其所とらふ我墓とやり出し洗ひ清り時々祭供とせしむる  
村長これと聞き信ぜぬ狸あいの着る空言といふはあんと思ひ  
更ふ承引の辞あり病者ありし事と説く頼む村長の誠は靜の  
靈ありハ所望すべき事とてり傳へき靜の前ハ其母儀の前司小舞曲と

あつひ其頃あつひあま妙手ありしは早々一曲と舞て見せしむるべし左  
なくハ静の冥よあまじと蝙蝠一柄と出しく与ふ病者其理は銘して病と  
とつて舞ふ其曲もあつて絶妙なり村長これと見ると今ハ疑ふまじりとて  
田井の池とつらち見ると二基の古塔と得たり又掘出せる傍は堀の形あど  
埋りれりしとあり一基ハ礎の前司が墳とてりやゆくと云病者の程あ  
本復し常の如くありしとて

極樂寺 同所より半町ぐり山の方より當寺より静の墓の縁起と出り

本尊 阿弥陀佛 安阿 観音勢至兩尊 行基 弥作

勝示川 水源ハ遠田村より出て池の内村王子村の兩村と經り此地ハ入静の墓の後辺より天神川は流る

放生川 水源ハ志筑中田村より出上と八幡川とのひ下と前川といふ

臨池葦 三宅谷池の右傍にあり本寺大日如來里正忍頂寺氏一家の菩提所ハ境内ハ十三層の石の古塔あり高サ一丈三尺余嘉元二年八月十五日の文とてふなり

若一王子權現社 王子村より此神社ありて以て王子村といふ王子志筑濱志筑浦遠田池内上川井竹谷志筑中田志筑畑上大町下大町ホ十一ヶ村の生土神といふ

例祭 正月元日 六月十五日 神輿御旅所へ渡御里俗鼻高祭と云

水無月の神事と里人鼻高祭と号し其故ハ天狗の假面と被りしもの雞刀と捨  
ち神輿と護りし前ハ進む其勢ひゆりし鳥居の注進繩と切る又獅子  
頭と被りし神輿の後ハ從ひ護り此天狗の面獅子頭といふ古色にて他  
有具といふ異あり各神輿出御しんと欲する時境内の群集の中と縦横ハ  
馳まるとり狂ひ戯る群集の諸人これと指して鼻高ノ鼻腐とわら  
けと言と追々ハ事頻りあり是ハ神と慰さめしむるの古例ありとて  
里俗稱し王子の鼻高祭といふ

多聞寺 那智山と号し真言宗社頭の東より推現社と守護ハ 辨財天祠 同上の方より

王子川 水源志筑の池の内村より横に流れ志筑濱村と經り當村中末より僅し西に流る

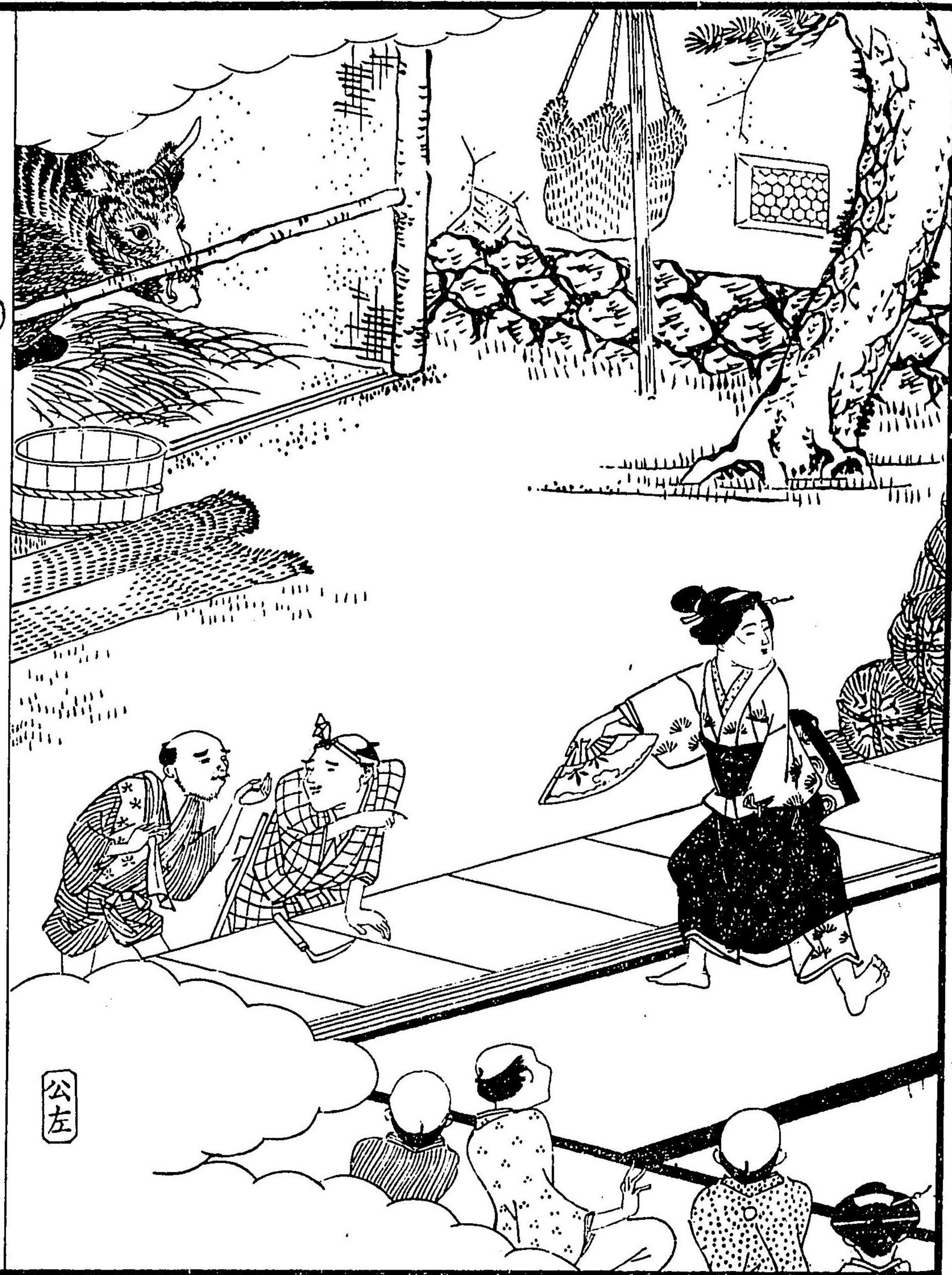
飯盛山 王子村より大谷村の境あり其形ち飯と盛るが如し八方より遠望あり形猶同し

薬師堂 同村より中林菴といふ本寺薬師佛 念佛堂 王子社より二町許南より心水菴といふ

杉尾社 左聖徳太子古青面金剛といふ 同村より牛頭天皇と祭る或大國龜といふ 足趾池 同村より其形より号す

五本松 同村より志筑の渾夫此松といふ海洋の塚と極むといふ 笠松 同村より 是も海洋の極めとあす

八方より能見也



公左



静女の霊  
 婢女を着て  
 時勢と舞ふ

一ノ五十二

日外内藏助古壘

志筑中田村より宇城山といふ山の頂き平地より縦三十間余横十二間  
此村に未住りしが内藏助當城某の嗣子とありて日外内藏助と稱し其子某は少く天正年中  
敵の爲に家亡ぶ則妙安寺に位牌有り牌面は先祖日外親王日外内藏助と記せり是は  
郡家郷の医師日外某親王の末葉ありと云く室永七年寅五月寄附せり

又廣石中村の医師沼井某の親王の末葉ありと云く景應三年の古記に所藏するは親王ハ山城  
国京住人安居院所藤原勝家と言ひて家の紋ハ所藏ハ木瓜あり嘉吉三年六月廿日志筑中田  
村に未住り嫡子山後石見勝信門列一の官合戦討死せり由記せりと云  
此説不審あり又常磐草子も親王の説ハ謬傳ありと云

城跡の北三町余距く平地三及許妙安寺三町前山つきまよきまよき主居と稱し又奥土居といふあり其山  
味地草按云土居ハ城主常居の地奥土居の後山と高塲と云是親王安座あり

故御所山或ハ御所の後の名有りハ内藏助落城ハ眷屬従卒を散々あり  
北山村ハ蟄居ハ農夫とあり其嫡男安居又右衛門郡家の古城主田村氏ハ仕へ

作奉行ハ今の代官と勢其嫡男三郎左衛門父の跡ハ嗣二男甚三郎ハ分戸  
ハ漸く未葉蔓ア今猶各農耕と以業ハ安久居の姓氏と私稱ハ

安居又安久居安居院日外等ハ作ハ云  
妙安寺 右同村より旧御所山といふ後世松栄山と改む日蓮宗寛永七年日外某より親王の灵位  
と寄附せりと云本堂の前ハ五輪の石塔あり親王の碑ありと言傳ふれとも題目の

文字幽見ありの其餘の文字分明あり按云當寺始御所山と号せり小仍く寺の地勢と  
考ふと丘の三方ハ構あり自然ハ館亭と構ふと形あり則此所親王偶居の地と云く王の薨後  
精舎と成り故御所山と号はあり寺の北の方と御所の後と改むは何てま故りてあり

長尾山觀音堂

右同村より萬福寺と号は本堂十一面觀世音座像長三尺許堂の並じ地藏弘法大師  
ホト安ハ當國觀音順礼の札所ハ此地の字と佐古といふ

里人云文政十年の頃伊賀の國人此村にまり彼國よりハ左近の觀音と當ると

崇敬ハ靈驗ありとて拜詣ハ未アと言ハ奉りつとぞ今此村ハ左近の

名義古傳詳あり往昔左近ハ人當尊像と造修せ故ハ号く此地

畝号と佐古と呼ハ左近の轉謬あり

志筑川

一村の諸水志筑川ハ八幡の辺に出り  
御門林 安久居親王の旧趾ハ近き所ハかゝる名あり

土居山古城址

王子村の境の高丘あり俗ハ城山といふ昔土佐守居城して所領五千石一説ハ三千石と  
りハ天正年中滅亡ハ法号良清院春山居士と云村谷村の里正菅氏某ハ土佐守未裔といふ

越後殿邸趾

古老云山下東土居ハ土佐守の常居の跡あり山頂ハ物見堂と設け置り一時土中より古銅陶器  
の類と掘出せり又古井あり今ハ損ハ埋り

高松氏邸趾

五百田の北山の頂き荒神の森あり其南凡廣ハ畝あり圓地あり高松と稱ハ一ハ高松某住ると云  
又此南東南の谷筋ハ殿の下といハ西北の後の谷筋ハ殿の後といハ事詳あり

碁石山

同浦の西の方より絶頂ハ役行者の堂あり  
此山の裾ハ海濱より岩屋街道の往還



鹽尾浦 志筑の南ニテ海濱あり塩尾村ト号ハ後ニ塩尾と改むトハ漢家マク且浪花の  
通船日々出入々平生ノ賑々舟着ノ石波ナリ

此所ノ山手ホ入テ福良の浦ニワケリ或ハ須本の城下ニテ是岩屋ノ本街道あり又濱道ニ  
是より安呼の下村の濱より厚濱村炬口塩屋ホと登テ洲本ニワケリ

大慈山觀音堂 塩尾村ニテ有テ普門寺トシ本堂十二面觀世音長二八許當國順礼の札所あり  
昔神利金比羅祠鐘堂前ニテ有テ毎年七月十五日伎踊ナリ

橋寄 浦の南の端ニテ此海濱ハ則チ須本ニテ濱街道ニ  
大巖 同海邊ニテ高四向余周十七八間  
此辺ニテ岩石多ク

住吉神社 楠崎の北の山腹ニテ本社東向石鳥居ハ海濱ニテ浦の邊ニテ有神あり  
例祭正月元旦 九月九日 六月晦日ホ

妙見祠 住吉の山の南ニテ此谷飾ト妙見谷ト云北辰星と祭ル  
毎年三月三日 鏡子との神あり  
妙見池 山の下ホあり  
上下ニテ所ニ

下司溪 下司村より出テ塩田川ニ入下司村ハ塩尾の西ニ隣リ  
岩屋より須本よりハ濱街道ニ

覺王寺 下司村ニテ有テ寶蓋山ト号テ世俗稱シ赤堂トシ往昔の本堂ハ丹砂ト以テ塗テ有テ  
斯ハ号トモ真言宗ニ當寺の東ハ岩屋より須本よりハ本街道ニ

古城蹟 同村ニテ有テ城の谷或ハ雉子の尾ト云  
城主姓名詳クハ

春日神社 塩田里村ニテ有テ隣リ塩田里 塩尾 下司 宮野原 山田原 上畑ホ六ヶ村の生土神あり  
或ハ標田の宮トモ稱レ

春日寺 右社地ニテ有テ真山ト号テ春日神社の社僧ニ真言宗  
本寺薬師佛木佛座像凡一尺六寸許

寶性寺 春日社の東傍ニテ有テ本寺地藏菩薩立像木佛長一尺余守護神の祠本堂の前右傍ニテ有テ  
七月廿四日例年佛會行ナリ

常寺小安置ニテ弘法大師ハ世ニ有テ所の形容ト異テ寶冠ト着テ蓮華

座小安以是と宗論の大師と尊信ハ

古城蹟 春日社の丑寅ニテ有テ直立北向ニテ絶頂ニ平地あり方六間許畝号ト貞常ト云  
是城主の名ありん乎一説ニ塩田左馬助重照の居跡ト云

鹽田溪 水源山田原より出テ宮野原塩田と經テ安呼川ニ入

蓮華寺 宮野原村ニテ有テ泰平山榮松院ト号レ

古城蹟 同村の東ホ有テ天文年間河合藤内の居跡ト云城趾の隅ニ一碑有テ藤内の古墳ト稱レ  
永祿六年癸亥三月十七日有テ平地の高丘三壇あり

古城蹟 同所ニテ有テ畝号ト稱田ト云天正年間塩田左馬介住レト云  
五十間許四方の平地三壇あり北の方ニ古井あり

菅古城 山田原村ニテ有テ本丸の趾十三間四方觀音の草堂墳墓ホ有テ又凡八間二十間次十二間ニ八間  
或ハ九間ニ九間又八間ニ九間七間ニ十間許の趾ト云高低有テ昔遠江守其子越後守ホ  
相テキテ居住セテ秀吉の爲メ滅亡トシテ後の山の嶺ニ六間四方の地ニ壇有テ矢倉  
趾ト云後の山と俗ニテ十郎山ト云名義詳クハ

片林山大師堂 古宮村常樂寺の西の山の半腹ニテ有テ本寺弘法大師長一尺許

二ツ石 同村ニテ有テ村の名ト云 二石川 同村ニテ有テ水源諸水ニテ所あり

大照寺 同村ニテ有テ無量山遍照院ト号テ本寺正觀音長二尺許弘法大師作ト云一説ニ往古ハ當寺  
大伽藍地あり故ニ今ハ尚通稱大寺ト云

觀音堂 同寺ニテ有テ當州巡拜二十三所の内  
第三番あり

市原庚申堂 市原村ニテ有テ本寺青面金剛と安ハ大官佛工定朝作平谷山松林寺ト号レ  
寛文十二年撰列四天王寺より勸請ナリ所ト云地名と庚申山ト云

松榮寺 庚申堂隣り尤庚申堂と守護の鳳来山と号し本寺薬師如来傳教作云  
又不動正觀音身内天と安ん鎮守余天祠庚申堂の傍なり  
平安郷遺趾 今廢し安呼下村安呼中田村の名なり

和名類聚抄曰淡路國津名郡平安

○平安とあまぐと訓し古語よての平易ありてのふ言し源氏物語にも出たり

平安溪 水源ハ中河系より出り溪の深き所ハ凡そ當時ハ安呼と書り

安呼窟 ぬぐ下村の海濱より山の裾に大岩より高さ一丈余幅三丈許深サ六七丈の洞窟  
りり藏王の窟より洞中小藏王権現の祠あり傍より少彦名の小祠あり洞の前  
石の鳥居あり又北の方より二丈許隔り浅き窟あり又南の方より浅き窟あり  
鎮祭此岩窟の前ハ須本より淡街道

例年六月御湯神樂あり 岩窟の南に穴あり智字院とて平僧あり社職と司す

海油山八幡宮 同村海濱の上手にあり安呼下村古宮村北谷村安呼中田村ホア村の生土神とい  
別當東山寺社地北の方なり

本殿 應神天皇 攝社 高良社 若宮 本殿の左 末社 松尾 氣比内宮 外宮 熊野  
舞殿 本殿の 舞殿の 神供所 舞殿の 鐘堂 隨身門 前より

例祭 春彼岸時中 神楽廻社 八月十五日 神楽演出 馳馬あり

古城蹟 同村より城の腰或ハ天守とも云村の中央より僅北の方ニ安宅監物秀良其子冬宗ニ炬口の城と云

墳穴 同村八幡宮の南ニ其数十四五の岩穴あり奥行三間口の濶さ三四尺四方許其辺に千騎と云常回りの傍  
岩穴の所より住古穴居の跡あり

上磯下磯 安呼下村の南ニ厚淡村の海辺にあり 諏訪社 同村にあり

水之大師堂 厚淡村下磯より海辺より東南と眺望し絶景の地ニ海岸小堂あり弘法大師の  
石像と安ん傍り清水あり故より水の大徳と称し上方ニ世三昧の觀世音と安ん草庵

和泉河内摂津の山々見へり景色よし 紀州名島 粟島

炬口古城 厚淡の南に炬口村あり浦の西北の方あり山手に一説ニ大永の頃安宅二郎三郎入道  
居住りたり或ハ安宅監物又ハ安宅甚太郎とも云

八幡宮 同村にあり末社兩祠あり當社古鐘と藏り 成願寺 同村にあり真言宗

離火権現祠 炬口の浦海崖の上の方より例祭六月十五日今夜諸方より舟より納涼し集詣りゆ

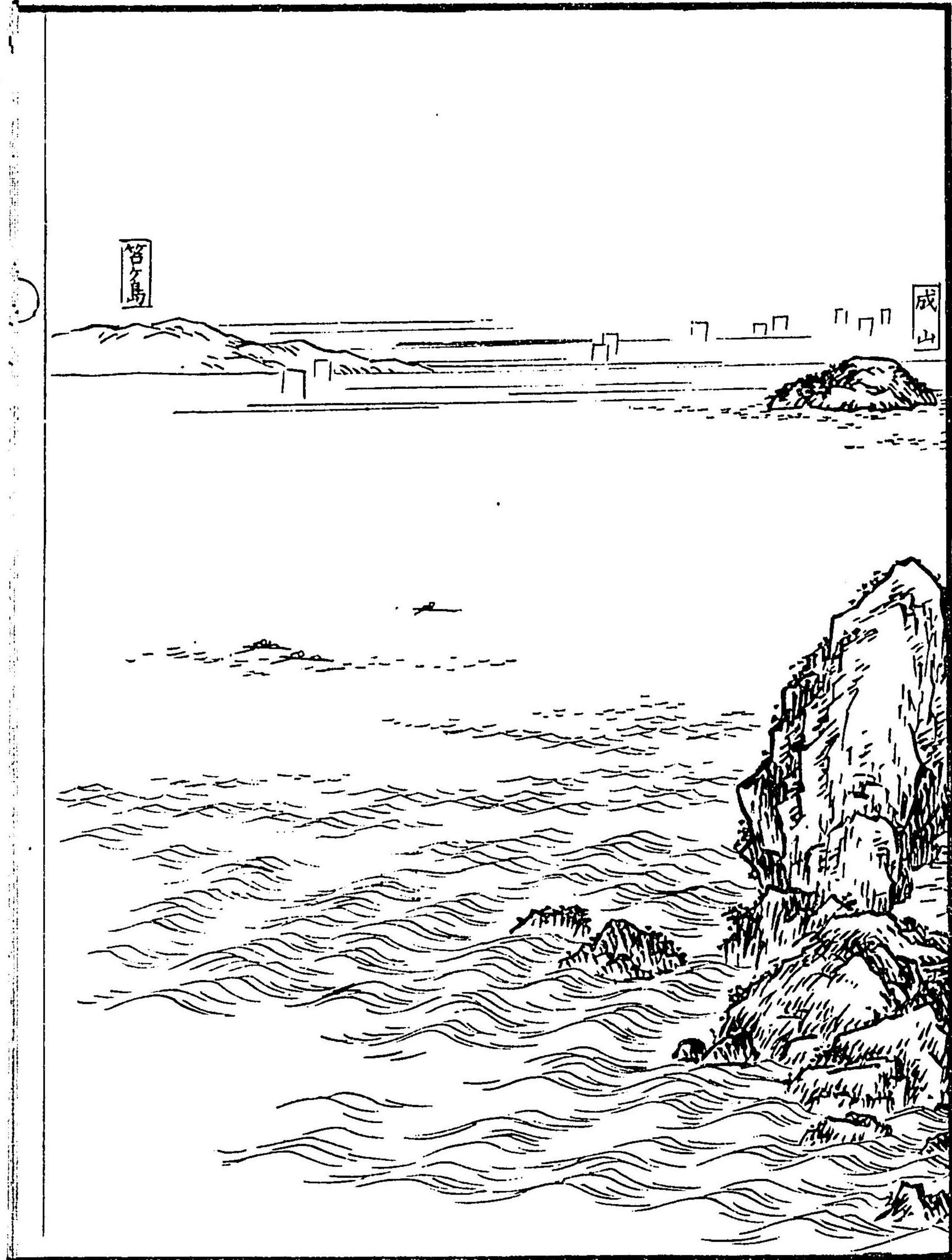
按小焼火権現ハ隱州島前千波里郡美田庄鎮座あり傳云往古人皇六十六代  
一條帝の御宇海中より出現し大山権現と祝ひ奉り所より異國本朝

四海の中より海上往來の舟風波の難逢し此権現ハ立願せしが忽ち利生あり

夜ハ海上火現び古今の靈驗幾許と就中去了永久年中後鳥羽院遷島の時波

高風荒し天子の御座舟危難ふ及ぶ時小権現ハ御祈り御歌歌ふ

吾あそハ新島守よ沖の海の荒き波風心し吹け



かゝる夜に入火忽ち現び帝喜ひ給ひ

浮あふ藻塩焼やと思ふべし何と焼火の煙あらん

御船難なく三保の浦小著る帝敵慮穏や

思ひやれ憂身と三保の浦風小泣く絞る袖の霽と

其後大山権現小詣り山と焼火山小改め寺と雲上寺と号けり

此神元来龍神あり其故に風波と謚め舟と助けり靈験まこと新あり

舟乗者何もの國も夜風波の難らひ雲閉る東西辨へる時焼火権現と

謹言せし忽ち海上小火現じ難たまわらぬ不思議の瑞驗なり云

程小當地に海濱あり漁家多し且海上往返の繁き所ありと以て風波安全

と守護の爲に勸請せりあり炬口とりの字義も火は縁らむ高故なりし

則當浦辺に洲本往還の濱街道あり四方の眺望頗る美觀あり

四日石屋と立ち炬口小至る海路七里餘西に淡路島とひゆけば奇岩長汀

山水滄々たり東に千里青山霞あり眺望の末小當り南の方小高野山あり

山門寺中の事あど思ひやられぬ覺へて翌より高野の見ゆ所あり

有まじれと舟人ふへが淡路の山中に入あがも高野山ありと云ふ

向くともあれ来る高野の山の霞とももふなりやはたがらうと云

同日船より下り陸行三里淡路の養宜の國府小至り云

西來寺

塩屋村にあり真言宗本寺阿彌陀佛左右三勢至觀音と安んじり惠心作と云

傳云り禪宗一の禪宗一の大道禪師の住居又再一名高き東福寺の兆殿司の淡路の産

一以禪師の弟子とあり一説は大道禪師西來寺小寓する時延文元年大道東福寺小住

獨存の卅歳あり至孝あり天性とありと画圖と好む三原郡安國寺の始祖大道

師の大道志は是と戒しむれども教訓小隨りざる故に終小師弟の約と

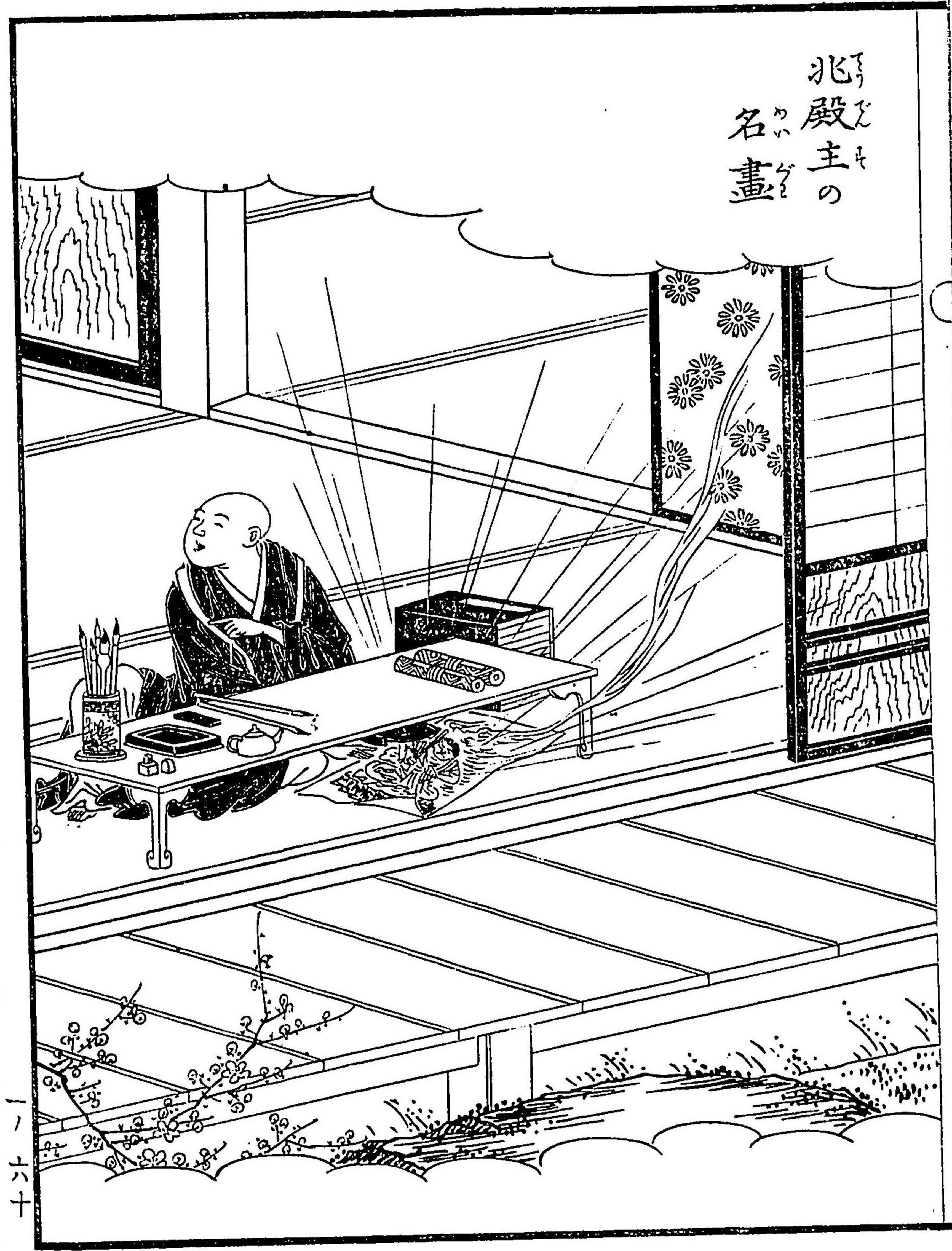
絶んと欲ひる小至る是小より明兆より凡と道路小乘らる者破屣あり

今我繪事と以て大道は棄らるこれに因り破州鞋と以て號とびと自ら



破草鞋の字と以て画中の印と一日偶大道師の出ると候て不動の  
像と畫く師やて還るに驚駭とされと膝下は藏の時画中の火燄勃起て掩ふ  
と能く雨より師の大道も大感し其神小服し再びこれと戒めばとそり  
應永年向東福寺の殿主とある故は俗に兆殿主と称し而して南明院に住其  
畫法道釋の像の宋の李龍眠と學び又元の顔輝が體と儼ふ時其圖式を用ひ  
者り其雲行水流りの天性自得超絶神入遠く宋元の間と覓る相比  
するもの少かり山水花鳥の長びり所はるるも佛像人物に至る本朝第一と  
まべり凡畫くとあらましく巨幅のり皆より意とめり其規と製は而して其  
勢ひ龍の飛がごとく鳳の翔るごとく凡筆の及ぶところ非は  
當寺小佛涅槃の像あり我大明國小遊其像と摸さんと時應永十五年 寺と  
出筑紫と赴んと欲は稻荷の橋の邊に到る時一僧忽然として来り何國より  
往やと向ふ殿主志はる所と語る僧のいり子遠く求むる事あり我其事を  
知らりとして懷中より一軸の涅槃像ととり出さへり如く失ぬ殿主

その跡と再拜し乃ち一卷と袖し寺に奉り遂に一大像と寫し本堂に納む  
和漢三才 一説小此時殿主貪く彩色の繪具あり然る小神の告ふより寺の  
東に河ありてあり五色の奇石あり是と拾ひ磨て彩色とあり小  
意は欲する所のとつと  
畫圖の下は應永十五年 五百羅漢の圖に専ら顔輝が圖不儼  
横二丈六尺縦三丈九尺 六月日明兆圖筆の字あり 寒山拾得 大像一丈二尺  
顔輝が真跡の鎌倉の建長寺に在り明兆これと寫し東福寺に歸りて後画とそり  
其草本又今 此外十六羅漢圖四十八祖像 達磨と始と半像 聖一國師  
像左に鐵拐右蝦蟆 劉海 三幅 各從丈 達磨正面像 大 正面白衣觀音像 幅今現不  
焉り佛殿の後門觀音像 左右各 法堂の蟠龍長十餘丈あり紙面不  
これと圖は其後これと掲げ堂宇の天井に貼る恰も生る如し凡そ天井に  
龍と画くと兆殿司と以て推輿とひと也其始兆殿主が老母淡路國よりて  
病臥故に一兆殿司不見んと欲は時東福寺あり方五百羅漢と  
畫く其功の半あり老母の命を背くことども佛像圖畫の事又あれと



捨すく下した不忍しのぶ心こころ以もつ因ゆゑ自らみづか吾われ真像まゝと寫うつしてこれと母はは不な致たりて其心そのこころと慰なぐさむ退ひ

耕菴こうあん性海しやうかい其像そのしやう不な贊さんと曰いは衣破いぱ戒かい不破な身み貧道ひんどう不な貧ひん 本朝 画史

天文中てんぶんちゆう東福寺とうふくじ住持ぢゆうぢ彭叔仙へいしゆせん和尚じやうしやう明兆めいせうの像しやう不な贊さんと曰いは

慧峰けいほう兆上せうじやう人者ひと日ひ本関國ほんかんこく最初しよじゆ淡州たんしゆ入事にりじ也天賦てんぷ真率まんとく頗少ひんせう

人情にんじやう愛畫あいが入於にり神丹青しんたんせい得え其妙そのめう焉や兆公せうこう世壽せじゆ三十二

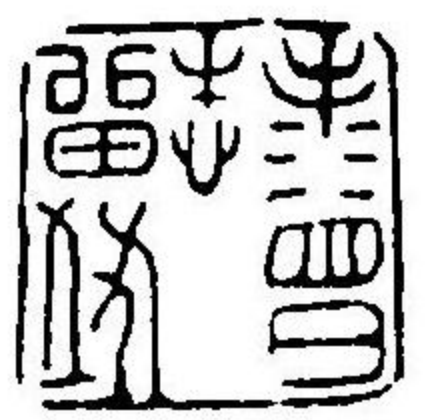
永德二年壬戌夏六月十八日寂

塩屋川しほやがわ 東向河物部川宇山ニ至つゝ谷流一塩屋洲本の向ヤ流れ入則ち北の岸ハ塩屋村南の岸ハ洲本あり此ニ橋と架せり四十五間許俗ニ塩屋と云

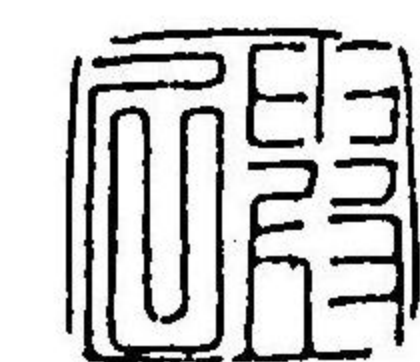
淡路国名所圖會一之卷終

編者 浪華

曉 鐘 成



松川 半山



畫師 仝

浦川 公佐



筆耕者

鎌田 醉翁



雕刻者

青山 富三郎





明治廿六年五月廿五日印刷  
全 年六月五日出版

價定七十錢

故人

著作者

木村彌四郎

右相續者

木村友松

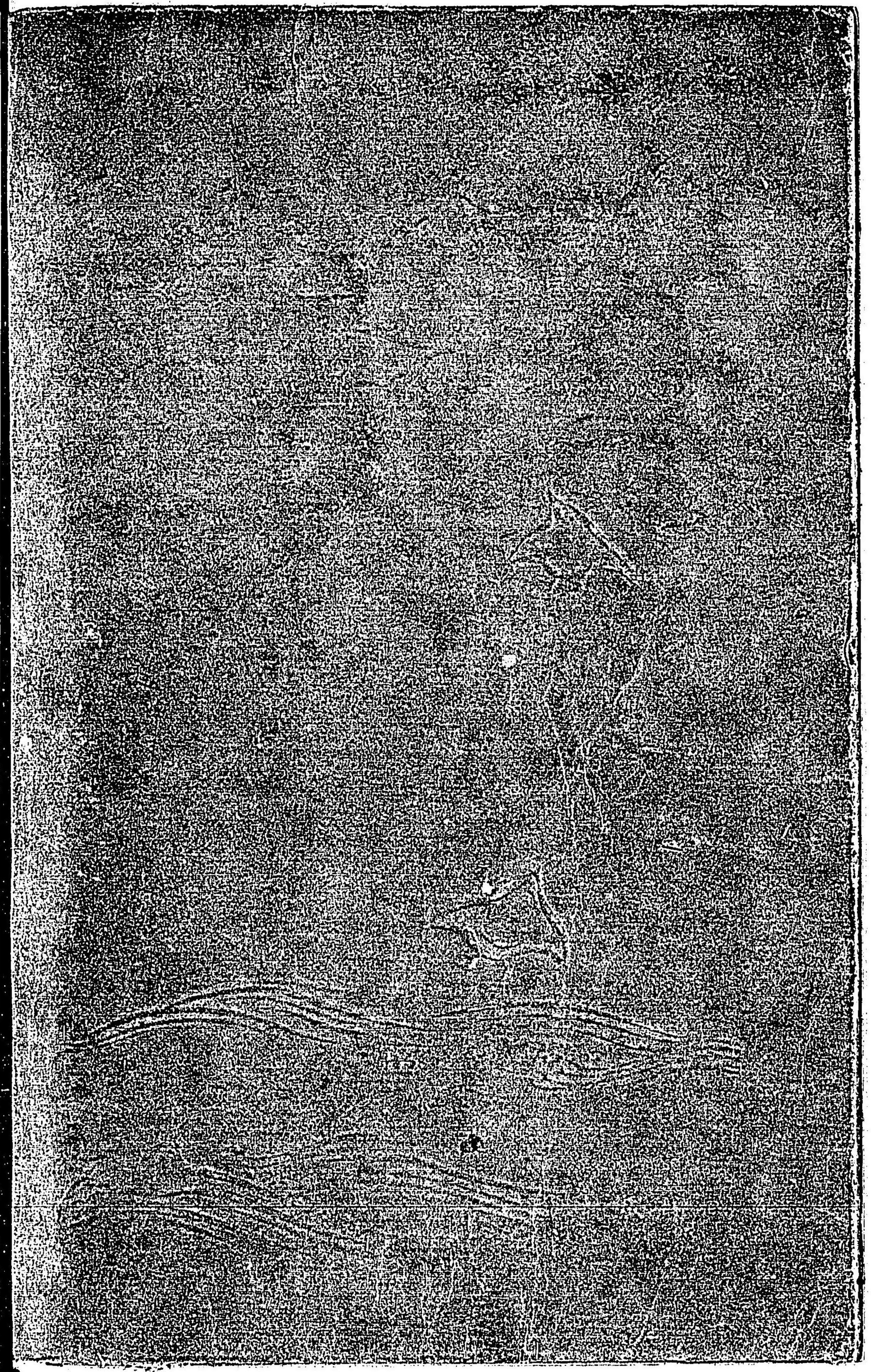
大坂市西區土佐堀通五丁目三十三番屋敷

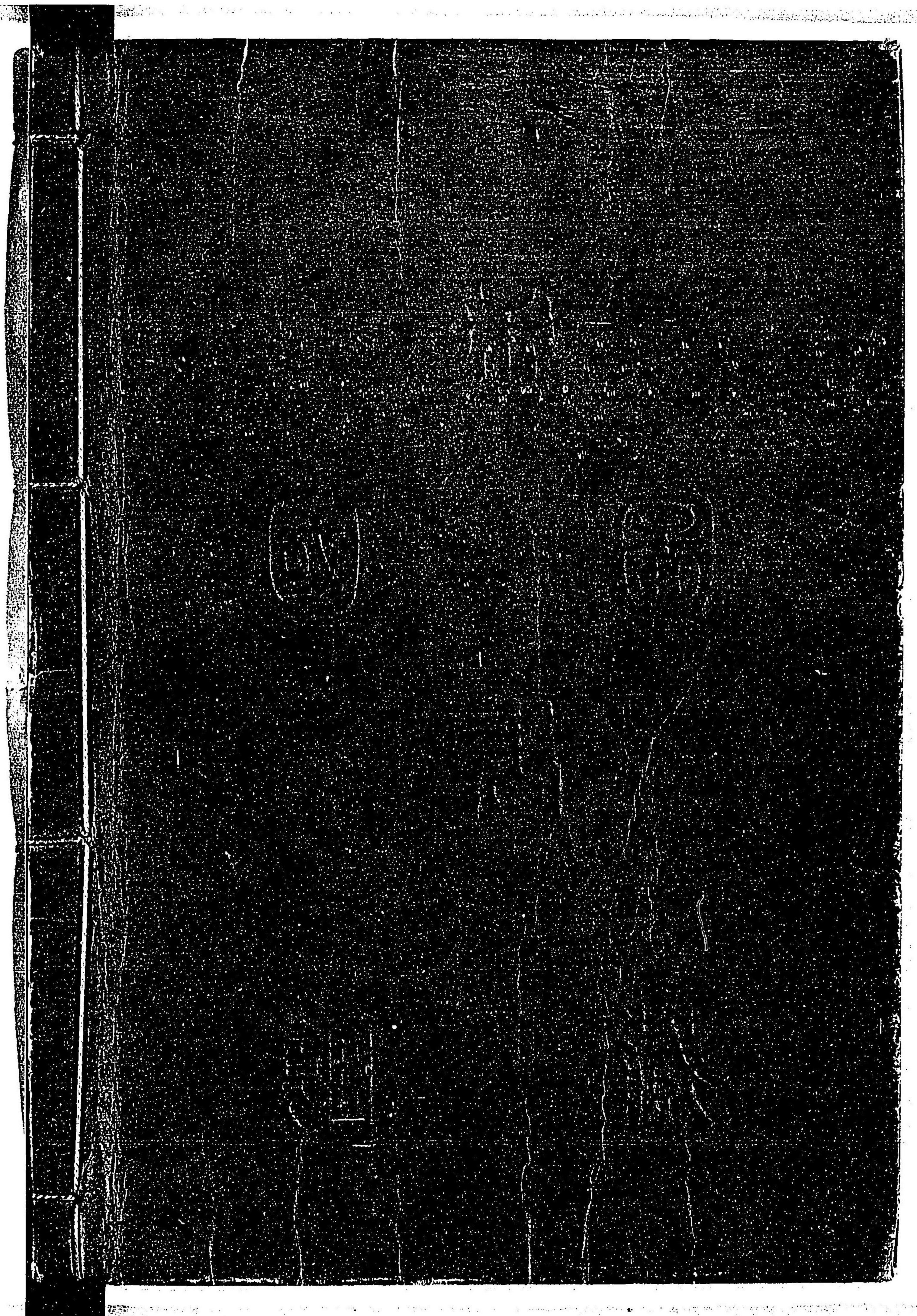
發行兼  
印刷者

福浦文藏

兵庫縣淡路國津名郡洲本町外通二百番地

10  
5  
19





淡路国名所図繪

025170-001-9

10-19

淡路国名所図繪

暁鐘成(木村 弥四郎) / 著

1冊

M26-27

ADC-2559

